

# パウロの ヘブル人への手紙

<https://ichthys.com/Hebrews-Home-Page.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

## 第 3 章



## 内容

第3章：モーセにまさるイエスと出エジプト世代という悪い実例 .....	3
I. 序論 .....	3
II. 翻訳 .....	22
III. 要約と意識 .....	23
IV. 節ごとの注解 .....	24
一節-二節 .....	24
三節-四節 .....	34
五節 - 六節 .....	37
七節～十節前半 .....	44
十節後半 - 十一節 .....	50
十二節 .....	60
十三節 .....	61
十四節 .....	66
十五節-十六節 .....	70
十七節-十九節 .....	72

# パウロのヘブル人への手紙

<https://ichthys.com/Hebrews-intro.htm>

ロバート・D・ルギンビル博士著

## 第3章：モーセにまさるイエスと出エジプト世代という悪い実例

### I. 序論

第3章は、三つの部分に分けることができます。第一は、イエスとモーセとの比較です(1-6節)。第二は、出エジプト世代という悪い手本です(7-14節)。第三は、その悪い手本を、パウロがエルサレムにいる同時代の人々に当てはめている部分であり、悪名高い、かつての世代の反逆と背教を分析することを通して行われています(15-19節)。この最後の点について、それが事実であることは、次の章の冒頭にあるパウロの勧告によって分かります。すなわち、「だから、あなたがたのだけれも、[出エジプトの世代と同じようなしかたで][神の]約束を投げ捨て、その安息に入り損なうように見える者が出ないよう、私たちは警戒しようではないか。」(ヘブル4章1節/NIV訳)

最初の段落(1-6節)において、パウロは、律法の「授与者」であり、それゆえ律法主義的傾向を持つ人々にとってはイスラエルの歴史の中で最も愛されてきた人物であるモーセと、イエス・キリストとを比較しています。しかしその比較を通して、パウロはイエス・キリストのきわめて大きな優越性を示しています。パウロは、「家」あるいは「家族」という比喻を用いることによって、論理的に主の絶対的な至高性を証明します。すなわち、いかなる家または家族においても、その主人であり建て主である者は、それを管理するために任命されたしもべよりも、本質的にすぐれているということです。このたとえを通して、パウロは読者たちに、時代区分が変わったことを思い起こさせています。彼らはもはやモーセの律法の下にいたのではなく、御霊の法則の下にいました。そして、この重要な真理を受け入れず、行動や適用をそれに応じて改めることなく、過去に固執し続けたことこそが、彼らの霊的衰退という問題の中心にあったのです。

なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。(ローマ 8 章 2 節)

第二の段落(7-14 節)において、パウロは、聖書の中で頻繁に用いられる手法、すなわち、現在の状況を聖書に記されている過去の例と比較することによって、類似した過去の出来事との類比を通して、現在の状況における決定的な(しばしば否定的な)側面を明らかにするという方法を用いています<sup>1</sup>。ここへブル書第 3 章で用いられている比較、すなわち、出エジプト世代の失敗と、彼らが神およびその代理者であるモーセに対してたびたび反逆したことは、この種の類比の中でも、聖書において最も頻繁に用いられているものの一つであり、現在の時代の行動に問題があることを示す必要がある場合に用いられます(詩編 78 篇 8-51 節, 81 篇 10-12 節, 95 篇 8-11 節, 106 篇 6-33 節; エゼキエル 20 章 13-24 節; ネヘミヤ 9 章 16-18 節; ホセア 13 章 5-6 節; アモス 5 章 25-26 節; 使徒行伝 7 章 39-42 節)。

第三の段落(15-19 節)において、パウロは、出エジプト世代の失敗の根本的な理由を明らかにし、そのうえで、この例を、最初は直接的な名指しをせずに、暗にエルサレムの信者たちに適用しています(その直接的な適用は、次の章の最初の節、「われわれのうちだれも、落ちこぼれるようなことがないように」[へブル 4 章 1 節]においてなされます)。それは、読者たちにまず「彼ら自身にも当てはまる」ことを自ら認めさせるためです(そして、彼らが同じ型にはまり込んでいたことに気づいたとき、その適用がいつそう痛烈なものとなるためです)。このようにして、この章の終わりにおいて(そして第 4 章へと続いて)、パウロは、エルサレムの会衆に対し、自分たちの行動を、あの先の悪名高い世代の反逆と比較するよう促しています。そして、彼らが今、**律法へと逆戻りしていること**、そのこと自体が、モーセの直接的な指導との下であの世代が**律法から離れ去ったこと**と同じように、不適切であり、また反逆的であるということを理解させようとしているのです。

この章の三つの段落は、それぞれ三つの重要な聖書的教理／概念についての事前の理解を前提として成り立っていることを考えると、節ごとの注解に入る前に、復習という形でそれらを先に扱っておくことが有益でしょう。

---

<sup>1</sup> 預言においては、この手法はしばしば逆の形で用いられます。すなわち、将来の終末論的な出来事を参照することによって、同時代の状況を説明するという方法です。このような手法の中で最も一般的なものが、「主の日のパラダイム」です。[「来たる艱難期」第 1 部.IV.1.「解釈学上の問題」](#)を参照してください。

**時代区分(ディスペンセーション)：**

パウロはこの章を、エルサレムの信者たちに、彼らが今生きている新しい時代を思い起こさせることを目的とした一つの段落(1-6節)で始めています。すなわち、イスラエルの時代は終わりを告げており<sup>2</sup>、教会の時代こそが、彼らがそれ以前の時代の規範ではなく、その規定の下で自らのキリスト者としての生活を送るべき時代区分となっていたのです。

第1章の考察で見たとおり、「時代区分(ディスペンセーション)」という語とその聖書的意味は、福音派の教えの中でしばしば誤って適用されてきました<sup>3</sup>。時代区分の教理に関する重要な点は、それぞれの区分における神の民の構成にある**ではありません**(というのも、アダムとエバから艱難期の期間中に救われる最後の一人に至るまで、私たち信者はすべて、キリストの花嫁であり、キリストの集会であり、キリストの教会の一員だからです)。むしろそれは、神の**真理**がその中で**どのように**分配されるか、という点に関わっているのです([ヘブル1章1-2節](#))。この点こそが、人類の歴史のあらゆる時期と期間、すべての「時代区分」において、神がご自分の民を統御される際の中核的要素です。信者として私たちが行うすべてのことは、**真理**に関わることであり、言い換えれば、アダムとエバからキリストの千年王国の統治期間中に救われる最後の一人に至るまで、信者の生におけるすべては、真理であるイエス・キリストに**関わっているのです**([ヨハネ14章6節](#))。神の家に入るためには、私たちは真理、すなわち福音を必要とします。そして、救われた後に神に正しく仕えるためには、神のすべての真理(すなわち、聖書に含まれるすべての事柄)を知り、学び、それに応答する必要があります。キリストが肉となって来られ、十字架の暗闇の中で苦しみ、世の罪の代価を支払われる以前には、福音の提示の形は異なりましたが、その本質は常に同じでした。すなわち、神の犠牲を信仰によって受け入れることによる救いです。また、信者が自らの人生において神のご計画を成し遂げるために必要とする、神の真理の残りの部分の備え、形態、提示のされ方も、主の初臨以前、そして特に教会にとって決定的に重要な点として、聖書正典が完成する以前には、その備え方、形、提示のされ方に違いがありました。聖書正典は、今日における神のすべての真理の唯一の源です(ただ

---

<sup>2</sup> もちろん、イスラエルの時代は、厳密に言えば現在は中断状態にあり、なお七年分が残されています(艱難期)。それは、ダニエルの第七十週([ダニエル9章24-27節](#))であり、教会時代の最後の七年と重なり合って共有される期間です。[SR 5『人類史における七つの千年日』第II部 9.e節「艱難期の重なり」](#)を参照してください。

<sup>3</sup> 本シリーズ第1章 I.e.「時代区分(ディスペンセーション)」(本書87頁)、ならびに「サタンの反逆(SR)第5部『人類史における七つの千年日』第II.5.「人類史における五つの時代区分」、さらに「聖書の基礎(BB)第6部 B『教会論』第I部 B.5.a節「御霊の時代区分」を参照してください。

し、神の創造が与える自然啓示を除いて：[詩編 19 篇 1-6 節](#)；[使徒行伝 17 章 24-28 節](#)；[ローマ 1 章 18-20 節](#)参照）。

(1)神は、むかしは、預言者たちにより、いろいろな時に、いろいろな方法で、先祖たちに語られたが、(2)[しかし今]この終りの時には、御子によって、わたしたちに語られたのである。神は御子を万物の相続者と定め、また、御子によって、もろもろの世界(すなわち、時空)を造られた。(ヘブル 1 章 1-2 節)

十字架以前、神は、ご自分の民に必要な真理を「分配」されるために、さまざまな手段を用いられました。十字架直前までの時代においては、モーセの律法と、それに付随する文書と儀式を通して(また、預言者たちと預言を通して)それを行われました。しかし、十字架におけるわれらの主の偉大な勝利、すなわち神の全計画の土台の後、教会のこの時代にある信者たちは、内住される聖霊、完成した聖書正典(ヘブル書が書かれた時点では、まだ形成の途上にありました)、そしてキリストの教会を養うために御言葉から必要な真理を引き出すのに必要な、霊的賜物によって祝福されています(使徒職、預言、異言などのいくつかの特別な賜物は、正典が完成するまでの空白を埋める目的で、パウロの時代にはなお働いていました)。すなわち、今や明らかにされたすべての奥義を受け取るために必要な、すべてのものが与えられているのです([マタイ 10 章 26 節](#), [11 章 25 節](#)；[マルコ 4 章 11 節](#), [22 節](#)；[ルカ 8 章 17 節](#), [10 章 21 節](#), [12 章 2 節](#)；[ローマ 11 章 25 節](#), [16 章 25 節](#)；[第一コリント 2 章 7 節](#), [4 章 5 節](#), [15 章 51 節](#)；[エペソ 1 章 9 節](#), [3 章 2-10 節](#), [5 章 32 節](#), [6 章 19 節](#)；[コロサイ 1 章 26-27 節](#), [2 章 2-3 節](#), [4 章 3 節](#)；[第一テモテ 3 章 9 節](#), [16 節](#)；[第二テモテ 1 章 8-10 節](#)；[第一ペテロ 1 章 12 節](#)；[黙示録 10 章 7 節](#))。

(4)わたしの兄弟たちよ。このように、あなたがたも(すなわち、夫の死によって再婚の自由を得た女のように)、キリストのからだをとおして、律法に対して死んだのである。それは、あなたがたが他の人、すなわち、死人の中からよみがえられたかたのものとなり、こうして、わたしたちが神のために実を結ぶに至るためなのである。(5)というのは、わたしたちが肉にあった時には(すなわち、霊的に死んでおり、罪の性質に支配されていた時)、律法による[呼び覚ましを受けた]罪の欲情が、死のために実を結ばせようとして、わたしたちの[からだの]肢体のうちに働いていた。(6)しかし今は、わたしたちをつないでいたもの[「最初の夫」]に対して死んだので、わたしたちは律法から解放され、[今は]その結果、古い文字[すなわち律法]によってではなく、新しい霊によって[主に]仕えているのである。(ローマ 7 章 4-6 節)

(1) こういうわけで、今やキリスト・イエスにある者は罪に定められること[さばき]がない。(2) なぜなら、キリスト・イエスにあるいのちの御霊の法則は、罪と死との法則からあなたを解放したからである。(3) 律法が[罪ある人間の]肉により無力になっているためになし得なかった事(すなわち、罪の問題を解決すること)を、神はなし遂げて下さった。すなわち、[贖いとして][神は、]御子を、罪の肉の形で[すべての]罪のためにつかわし、肉において罪を罰せられたのである。(4) これは律法の要求[する完全な義]が、肉によらず霊によって歩くわたしたち(すなわち、信者たち)において、満たされるためである。(ローマ 8 章 1-4 節)

(16) わたしは命じる、御霊によって歩きなさい。そうすれば、決して肉の欲を満たすことはない。(17) なぜなら、肉の欲するところは御霊に反し、また御霊の欲するところは肉に反するからである。こうして、二つのものは互に相さからい、その結果、あなたがたは自分でしようと思うことを、することができないようになる。(ガラテヤ 5 章 16-17 節)

これらおよび他の多くの同様の箇所は、聖書をざっと読むだけの読者であっても理解すべきことを、きわめて明確に示しています。すなわち、キリストの勝利と、それに続く聖霊の賜物(その付随する賜物、力づけ、そして正典の完成を伴うもの)が、信者たちが今やどのようにして神の真理を学び、それを適用する助けを受けるかという点において、すべてを完全に変わってしまったということです。それは、石に刻まれた律法によってではなく、私たちの心に書き記された真理を思い起こさせてくださる御霊を通してであるのです([第二コリント 3 章 2-3 節](#), [7 節](#))<sup>4</sup>。

だれでもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。(第二コリント 5 章 17 節)

新しいぶどう酒は新しいぶどう皮袋を必要とします。そうでなければ、新しいものの力が古いものの弱さを破ってしまうからです([マタイ 9 章 17 節](#); [マルコ 2 章 22 節](#); [ルカ 5 章 37 節](#))。このように、十字架の現実と御霊の賜物とは、必然的に、神の真理を分配するまったく新しい方法、すなわち教会時代の新しい時代区分をもたらしました。英語の「デイスペンセーション」という語のもとには、ギリシヤ語 オイコノミア(oikonomia)があり、その語源には、「家」あるいは「家族」を意味するギリシ

---

<sup>4</sup> これらの事柄は、[BB 5『聖霊論』](#)において詳しく扱われています。

ヤ語 オイコス(οἶκος/oikos) があります。この関連を認識することは、時代区分という聖書的概念の本質、すなわち、一つの家族に必要なすべての支えを供給することを理解するために重要です(「家の経済(eco-nomics)」もまたオイコスに由来します)。

(42)そこで主が言われた、「主人が、召使たちの上に立てて、時に応じて定め  
の食事をそなえさせる忠実な思慮深い家令(文字どおりには「分配者」、オイコノモス  
〈οἰκονόμος/oikonomos〉から)は、いったいだれであろう。(43)主人が帰っ  
てきたとき、そのようにつとめているのを見られる僕は、さいわいである。(44)  
よく言うておくが、主人はその僕を立てて自分の全財産を管理させるであろう。  
(ルカ 12章 42-44 節)

上で述べられている主の言葉が示しているとおおり、すべての聖書の時代において、  
管理人／管理、分配者／時代区分、監督者／管理という機能は、信仰の家である家  
族に靈的な食物を供給することに関わってきました。モーセは、出エジプトの時とそ  
の後の四十年間に、自分の管理の下に置かれた特定の家族に靈的な食物を供給し  
ただけでなく、その後続く全時代区分のための規則を書き、その実行の指示も与えら  
れました。それらの規則は、神の特別な国民のために靈的な食物を供給する体系を定  
めるもので、メシヤの到来の時まで続くものでした……

(1)わたしの言う意味は、こうである。相続人が子供である間は、全財産の持ち  
主でありながら、**僕となんの差別もなく**、(2)父親の定めた時期までは、**管理人や  
後見人の監督の下**に置かれているのである。(3)それと同じく、わたしたちも子供  
であった時には、いわゆるこの世のもろもろの靈力(ストイケイヤ)の下に、**縛られ  
ていた者**であった。(4)しかし、**時の満ちるに及んで**、神は御子を女から生れさせ、  
**律法の下**に生れさせて、おつかわしになった。(5)それは、**律法の下にある者**をあ  
がない出すため、わたしたちに子たる身分を授けるためであった。(6)このよう  
に、あなたがたは子であるのだから、神はわたしたちの心の中に、「アバ、父よ」  
と呼ぶ御子の靈を送って下さったのである。(7)したがって、あなたがたはもはや  
**僕ではなく、子である。子である以上、また神による相続人である。**(ガラテヤ4章1-7節)

キリストはあらゆる点でモーセにまさっておられますが、ここで私たちにとって重要な  
のは、モーセが仲介者であり、彼が責任を負っていた家族に靈的な食物を供給するそ  
の手段が一時的なものであったという点です。それは、儀式と影とから成り、神のすべ  
ての奥義が啓示される時、すなわち、それらすべてを包含するお方である人の子が世  
に示される時を前もって指し示すものでした。十字架を通して、私たちはモーセの律法

に内在していた儀式と影への奴隷状態から解放され、救い主イエス・キリストであるその御子への信仰によって、神の子として任命されました。今や聖霊を与えられている私たちは、律法の下にあった以前の世代が夢見ることしかできなかった霊的な食物にあずかることができます([第一ペテロ 1 章 10-12 節](#); [ルカ 10 章 24 節](#); [ヨハネ 8 章 56 節](#)参照)。このようにして、私たちの文脈における「家／家族」とは、イスラエルの時代(モーセ以後)と教会の時代というそれぞれの時代区分を指しており、前者は、その最初の管理人または分配者として与えられた者によって表され、後者は、エデンからその再臨と私たちの復活に至るまで、全教会の上に主人としておられるお方によって表されています。

(8)…あらゆる知恵と悟りとをわたしたちに賜わり、(9)[神は]御旨の**奥義**を、[キリストにあって]自らあらかじめ定められた計画に従って、わたしたちに示して下さったのである。(10)それは、時の満ちるに及んで**実現される**ご計画(文字どおりには「デイスペンス/分配」、オイコノミア〈οἰκονομία/oikonomía〉、すなわち、教会が完成する教会の時代における管理)にほかならない。それによって、神は天にあるもの地にあるものを、ことごとく、キリストにあって一つに帰せしめようとされたのである。(エペソ 1 章 8 節後半-10 節前半)

モーセとキリストとの間にある、この決定的な対比を読者たちに明らかにすることは、パウロにとって特に重要でした。というのも、この比喻を通して、彼はエルサレムの信者たちが、はるかに劣った供給の手段へと後退していることを悟らせようとしたからです。さらに悪いことに、その供給の体系は、その時と目的が過ぎ去ったため、もはや神によって力づけられてはいませんでした([ローマ 6 章 14-15 節](#), [10 章 4 節](#); [ガラテヤ 3 章 10-13 節](#), [3 章 23-25 節](#), [4 章 1-7 節](#), [5 章 1 節](#), [5 章 4 節](#), [5 章 18 節](#); [エペソ 2 章 15 節](#); [第一コリント 9 章 20-21 節](#)参照)。そして最も悪いことに、彼らは律法に関わることによって、奴隷の身分に戻り、十字架において彼らのために勝ち取られた子としての身分を放棄し、すべてのものの主人である方に背を向けていたのです。

(19)そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の**家族**なのである。(20)またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。(21)このキリストにあって、建物全体が組み合わされ、主にある**聖なる宮**に成長し、(22)そしてあなたがたも、主において共に建てられて、**霊なる神のすまい**となるのである。(エペソ 2 章 19-22 節)

直前に掲げたこの箇所も、同じく使徒パウロによって記され、異邦人の読者に宛てられたものです。十字架と聖霊の到来の後になって初めて明らかにされた「奥義」の一部とは、異邦人も今やイエス・キリストの教会の完全で対等な機能的成員とされている、という事実です。この「家」の時代、すなわち教会時代においては、神のご計画はもはや、単一の地理的場所に集中した一つの特別な民族を通して運営されているのではなく、ユダヤ人と異邦人とが御霊にあって対等な共同参与者として結ばれた、世界的規模のイエス・キリストの教会を通して実施されているのです。私たちは共に「結び合わされ」、また「建て上げられて」、神の住まいとされていきます。それは聖霊の力によってであり、聖霊が霊的賜物を分け与えられることによって、また世界中で聖霊が諸々の奉仕を力づけてくださることによってです。そこでは、賜物を与えられたキリスト者たち(そしてすべてのキリスト者は賜物を与えられています)が、イエスが任命された奉仕を行い、その働きの実は父によってあらかじめ定められているのです([第一コリント 12 章 4-6 節](#))。

(4)主は、人には捨てられたが、神にとっては選ばれた尊い生ける石である。(5)この主のみもとにきて、あなたがたも、それぞれ生ける石となって、(聖霊によって)霊の家に築き上げられ、聖なる祭司となって、イエス・キリストにより、神によるこぼれる霊のいけにえを、ささげなさい。(第一ペテロ 2 章4-5節)

この真理——すなわち、霊的成長に対する責任が、ユダヤ民族から、地上に生きているすべての信者の全体へと移されたということ——は、エルサレムの多くの人々が新しい現状を受け入れることに消極的であり、むしろ今や機能を失った律法へと戻ろうとしたその姿勢を、部分的にはありますが、確かに説明するものです([マタイ 21 章 43 節](#))。というのも、主に反対したイスラエルにおける「この世代」の傾向が、主の再臨に至るまで続くことを、私たちは事実として知っているからです([マタイ 24 章 34 節](#); [マルコ 13 章 30 節](#); [ルカ 21 章 32 節](#); [ローマ 11 章 25 節](#); [申命記 32 章 5 節](#), [20 節](#); [詩篇 12 篇 7-8 節](#); [95 篇 10 節](#); [箴言 30 章 11-14 節](#); [エレミヤ 2 章 31 節](#), [7 章 29 節](#) 参照)。また私たちは、異邦人が含められることに対するねたみが——それがイスラエルが常に神と持ってきた特別な関係を何らかの形で低下させるかのように誤って思われたために——当時のユダヤ人たちが福音に対して示したかたくなさと抵抗の中心にしばしばあったことを、聖書の多くの例からも知っています([マタイ 27 章 18 節](#); [ルカ 4 章 23-30 節](#); [使徒行伝 13 章 43-45 節](#), [17 章 5 節](#), [22 章 21-22 節](#); [ローマ 10 章 2 節](#), [11 章 25 節](#) 参照)。エルサレムにいるこれらの信者たちにとって特に問題なのは、彼らが信者でありながら、その現在の行動が、信者にふさわしいものとはまったく言えず、その否定的な行動が、彼らを主から遠ざけていたという点です。

ユダヤ人とギリシヤ人との差別はない。同一の主が万民の主であって、彼を呼び求めるすべての人を豊かに恵んで下さるからである。(ローマ 10 章 12 節)

もはや、ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあって一つだからである。(ガラテヤ 3 章 28 節)

これらは、ユダヤ的例外主義という考えのもとで育てられてきた者にとっては、誰にとっても聞くのがつらい言葉でした。そして、神殿とその儀式が、モーセの律法全体とともに、今やもはや有効ではなくなったという考えは、使徒たちにとってさえも、理解し受け入れるまでに長い時間を要しました<sup>5</sup>。それゆえ、不信仰な隣人たちから排除されるという圧力が加わったときには(ヨハネ 9 章 22 節, 12 章 42 節, 16 章 2 節参照)、多くのエルサレムの信者たちは、ある意味では心地よくもあつた、以前の宗教的な同調へと戻るほうが、より容易であると感じました。しかし主は、このような主ご自身に対する信仰の根本的な妥協を、そのままにしておかれることはありませんでした。律法にどれほどの善いものがあつたとしても、当時の不信仰な宗教的世代は、それに実際の信仰なしに、ただ口先だけで従い、伝統的な儀式に携わりながら、むなしく神を拝み、人の戒めを教えとしていたのです(マタイ 15 章 9 節)。

(37)まただれも、新しいぶどう酒を古い皮袋に入れはしない。もしそんなことをしたら、新しいぶどう酒は皮袋をはり裂き、そしてぶどう酒は流れ出るし、皮袋もむだになるであろう。(38)新しいぶどう酒は新しい皮袋に入れるべきである。(39)まただれも、古い酒を飲んでから、新しいのをほしがりはしない。『古いのが良い』と考えているからである」。 (ルカ 5 章 37-39 節)

時代は——劇的に——変わりました。新しい時代区分が到来しました。神の真理は、もはや一つの中心的な場所から影の形で分配されるものではなくなりました。真理は今や、まもなく完成する聖書正典の中にのみ宿ることになったのです。祭司やレビ人が、神の家の選ばれた管理人であるという時代も終わりました。神の多様な恵みを管理することは、今やすべての信者に割り当てられています。なぜなら、すべての信者が今や聖霊によって内住され、賜物を与えられているからです。このすばらしい変化は、ねたみと不満に満ちた、今や時代遅れで正当性を失った過去の実践へと後退する理由ではなく、喜びの理由であるべきでした。

---

<sup>5</sup> [聖書の基礎第 6 部 B『教会論』I.B.5.「移期の時期と現在の現状」](#)を参照してください。

(6) あなたがたが誇っているのは、よろしくない。あなたがたは、少しのパン種が粉のかたまり全体をふくらませることを、知らないのか。(7)新しい粉のかたまりになるために、古いパン種を取り除きなさい。あなたがたは、事実パン種のない者なのだから。わたしたちの過越の小羊であるキリストは、すでにほふられたのだ。(8)ゆえに、わたしたちは、古いパン種や、また悪意と邪悪とのパン種を用いずに、パン種のはいつていない純粋で真実なパンをもって、祭をしようではないか。(第一コリント 5 章 6 節)

(12)こうした望み[すなわち御霊の務めからの支えに基づくもの]をいただいているので、わたしたちは思いきって大胆に語り、(13)そしてモーセが、消え去っていくものの最後をイスラエルの子らに見られまいとして、顔におおいをかけたようなことはしない。(14)実際、彼らの思いは鈍くなっていた。今日に至るまで、彼らが古い契約を朗読する場合、その同じ[ような種類の]おおいが取り去られないまままで残っている。それ[そのおおい]は、キリストにあってはじめて取り除かれるのである。(15)今日に至るもなお、モーセの書が朗読されるたびに、[ある種の]おおいが彼らの心にかかっている。(16)しかし主に向く時には、そのおおいは取り除かれる。(17)主は霊である。そして、主の霊のあるところには、自由がある。(第二コリント 3 章 12-16 節)

エルサレムの教会にいる信者たちが自らのキリスト者としての義務を引き続き怠り、今や時代遅れとされたものへの回帰を悔い改めないでいることは、出エジプトの世代に降りかかったのと同じ結果を招きかねない状況を生み出していました。

### 出エジプトの世代の例：

ヘブル書第 3 章の第二の段落(7-14 節)において、上で述べたとおり、パウロは詩篇 95 篇を引用して、当時のエルサレムの信者たちの行動を、出エジプトの世代と比較しています。これは前にも述べたとおり、よく用いられてきた手法でした(詩篇 78 篇 8-51 節, 81 篇 10-12 節, 95 篇 8-11 節, 106 篇 6-33 節; エゼキエル 20 章 13-24 節; ネヘミヤ 9 章 16-18 節; ホセア 13 章 5-6 節; アモス 5 章 25-26 節; 使徒行伝 7 章 39-42 節参照)。というのも「この世代」は、主から多くの驚くべき奇跡と救いを経験しながらも、強情な背信と反逆で悪名高かったからです。そしてパウロは、この論法を以前にも用いていました。

(1)兄弟たちよ。このことを知らずにいてもらいたくない。わたしたちの[霊的な]先祖(すなわち、出エジプトの世代)はみな雲の下におり(すなわち、栄光によつ

て守られており)、みな海を通り、(2)みな雲の中、海の中で、モーセにつくバプテスマを受けた(すなわち、モーセと密接に結びつけられ、彼が受けたのと同じ保護と救いを受けた)。(3)また、みな同じ霊の食物(すなわち、神から与えられたマナ)を食べ、(4)みな同じ霊の飲み物(すなわち、神から与えられた水)を飲んだ。すなわち、彼らについてきた霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない。(5)しかし、彼らの中の大多数は、神のみこころにかなわなかったので、荒野で滅ぼされてしまった。(6)これらの出来事は、**わたしたちに対する警告<私たちが戒める実例-新改訳IV>であって**、彼らが悪をむさぼったように、わたしたちも悪をむさぼることのないためなのである。(7)だから、彼らの中のある者たちのように、偶像礼拝者になってはならない。すなわち、「民は座して飲み食いをし、また立って踊り戯れた」(すなわち、宴会の後に偶像的な儀式にふけた)と書いてある。(8)また、ある者たちがしたように、わたしたちは不品行をしてはならない。不品行をしたため倒された者が、一日に二万三千人もあった。(9)また、ある者たちがしたように、わたしたちは主を試みてはならない。主を試みた者は、へびに殺された。(10)また、ある者たちがつぶやいたように、つぶやいてはならない。つぶやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。(11)これらの事が彼らに起ったのは、他に対する警告としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する訓戒のためである。(12)だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。(13)あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはいないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。(第一コリント 10 章 1-13 節)

上の箇所 6 節でパウロが言っているとおり、出エジプトの時代のイスラエルの子らは、「私たちが戒める実例となった」のであり、それは否定的な模範であって、私たちがしてはならないことを示すものです。とりわけ、「この世代」に対して聖書が課している制約と、主に対する彼らの驚くべき反逆的行為の結果を考えると、そのことは明らかです。すなわち、「神は彼らの大部分を喜ばれなかった」のであり、「その結果、彼らの骨は荒野に散らされた」のです([第一コリント 10 章 5 節](#))。彼らは、「神の安息に入る」こと、すなわち、神が彼らに約束された乳と蜜の流れる地に至ることができなかつただけでなく、むしろ四十年間、不毛の荒野をさまよった末に、恥ずべき死を遂げました。これはまさに警告の物語であり、聖書の中でも最もよく知られたものの一つであり、すべての信者に、そして特に、これらの人々の子孫であったエルサレムの信者たちによく知られていました。彼らはおそらく、自分たちを、ヨシュアやカレブのように主のみこころを行った例外のほうに近い者だと想像していたことでしょう。そ

してある点において、彼らは正しかったのです。すなわち、当時のエルサレムの大多数の人々とは異なり、彼らは確かに主に応答し、同時代の人々が拒んだのとは違って、イエス・キリストをメシヤとして受け入れていたからです。しかし、キリスト者の生は、どこから始めたかではなく、どこで競走を終えるかにかかっているのです。

(24)あなたがたは知らないのか。競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。あなたがたも、賞を得るように走りなさい。(25)しかし、すべて競技をする者は、何ごとにも節制をする。彼らは朽ちる冠を得るためにそうするが、わたしたちは朽ちない冠を得るためにそうするのである。(第一コリント 9 章 24-25 節)

(7)あなたがたはよく走り続けてきたのに、だれが邪魔をして、真理にそむかせたのか。(8)そのような勧誘は、あなたがたを召されたかたから出たものではない。(9)少しのパン種でも、粉のかたまり全体をふくらませる。(ガラテヤ 5 章 7-9 節)

こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、**耐え忍んで**走りぬこうではないか。(ヘブル 12 章 1 節)

キリスト者の生は、ただ競走を始めることにあるのではなく、それを走り終えることにあります。パウロの手紙を受け取った人々は、よい出発をしていましたが、この時点では、御霊を通して真理を追い求めることから離れ、一方では事実上キリストを拒み、他方では、まだ来ていない救い主と、まだ成し遂げられていない救いを宣言する律法の儀式に再び関わることによって、事実上まったく競走から外れてしまっていました。したがって、上で引用した[第一コリント 10 章 1-13 節](#)における出エジプトの世代の失敗の回想にあるように、彼らが「悪いものを欲しがった」ように欲しがったわけでもなく、「偶像礼拝者になった」ようになったわけでもなく、「淫行をした」ようにしたわけでもなく、「不平を言った」ようにしたわけでもなかったとしても、当時の教会の中でこれほど特権を与えられていた信者たち——出エジプトの世代と同じように特権を与えられていた者たち([第一コリント 10 章 1-4 節](#))——が、自分たちの行動によって十字架を傷つけ、霊的成長への唯一の道、すなわち、律法の死んだ文字によるのではなく、恵みの御霊を通した真理への献身から背を向けることほど、冒瀆的なことはほとんどありません。というのも、それこそが、まさに「キリストを試みる」ことであり、「彼ら(出エジプトの世

代)が行ったこと」に匹敵するものだったからです。

(21)しかし、わたしは生きている。また主の栄光が、全世界に満ちている。(22)わたしの栄光と、わたしがエジプトと荒野で行ったしるしを見ながら、このように十度もわたしを試みて、わたしの声に聞きしたがわなかった人々はひとりも、(23)わたしがかつて彼らの先祖たちに与えると誓った地を見ないであろう。またわたしを侮った人々も、それを見ないであろう。(民数記 14 章 21-23 節)

#### 背教と死に至る罪：

上で述べたとおり、ヘブル書第 3 章の第三の段落(15-19 節)において、パウロは、第一の段落で確立された時代区分の転換という視点(そこで彼は、教会に対するキリストの支配が、律法を制定したモーセに比べてあらゆる点で優れていることを示しています)と、第二の段落における出エジプトの世代という否定的な模範とを結び合わせています。そしてこの第三の段落において、彼は、出エジプトの世代が失敗した根本的な理由を明らかにしています。エルサレムの信者たちは、キリストを拒んだ律法学者やパリサイ人たちと同様に、自分たちは「父祖たちのようではない」、すなわち、当時の問題であった律法主義ではなく、むしろ偶像礼拝に傾いていた捕囚前のイスラエルとは違うのだと自分たちを納得させていました。しかし、実際には、彼らはそれら以前の世代、とりわけ出エジプトの世代と、自分たちが思っていた以上に多くの共通点を持っていました。彼らもまた、その人々と同じように、不信実になり、主に対する信頼の欠如、すなわち不信仰によって行動し始めていたのです。

(29)偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは預言者の墓を建て、義人の碑を飾り立てて、こう言っている、(30)『もしわたしたちが先祖の時代に生きていたなら、預言者の血を流すことに加わってはいなかったらう』と。(31)このようにして、**あなたがた**は預言者を殺した者の子孫であることを、自分で証明している。(32)あなたがたもまた先祖たちがした悪の枅目を満たすがよい。(マタイ 23 章 29-32 節) (参照 [ルカ 11 章 47-48 節](#))

というのも、先の世代、特に出エジプトの世代がたどった道は、別の道筋(すなわち、律法主義ではなく偶像礼拝)によって、背信、背教、そして死に至る罪へと至りましたが、律法主義が最終的に行き着く先も同じだからです。さらに重要なことに、主から離れる反逆の仕組みは、当時も今もまったく同じでした。結局のところ、私たちが従うべき真理と神のみこころの代わりに、何が置き換えられるかは、少しも重要ではありません。見かけ上は聖別され、白く塗り固められたパリサイ的な自己義認の律法主義で

あっても、恵みを拒むなら——そしてそれによって必然的に、恵みの創始者であるイエス・キリストを拒むなら——偶像礼拝に劣らず、あるいはそれ以上に速やかに滅びへと至り得るのです。不信仰という道は、どのような名で呼ばれようとも、常に同じ信仰の難破に終わります(第一テモテ 1 章 19 節)。

偽善な律法学者、パリサイ人たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは白く塗った墓に似ている。外側は美しく見えるが、内側は死人の骨や、あらゆる不潔なものでいっぱいである。(マタイ 23 章 27 節)

律法主義には、例えば偶像礼拝と比べても、より巧妙で人を欺きやすい悪であるという、付加的な危険があります。それは、内側の腐敗の上に、敬虔そうな形を重ねるからです。

わたしが言ったのは、パンについてではないことを、どうして悟らないのか。ただ、パリサイ人とサドカイ人とのパン種を警戒しなさい。そのとき彼らは、イエスが警戒せよと言われたのは、パン種のことでなく、パリサイ人とサドカイ人との教のことでであると悟った。(マタイ 16 章 11-12 節)

過去と現在の反逆的な世代に共通していたのは、主とその真理を退け、その主と真理に代えて、価値のない代用品を自分たちの心の中に据えたという点でした。誤った教えを崇敬することは、偽りの神を拝むことと同じくらい悪いことです。というのも、最終的に見れば、そのような背信は、まったく同じ結末、すなわち背教、あるいは死に至る罪に行き着くからです。

しかし、彼らの中の大多数は、神のみこころにかなわなかったので、荒野で滅ぼされてしまった。(第一コリント 10 章 5 節)

神に反逆するというこの問題に関連して、ここで取り上げる必要のある福音派の誤った教理があります。カルヴァン主義は、その初期において生死を懸けた闘争を繰り広げていたローマ・カトリックの行いによる救いに対抗し、人間の行為よりも神の選びを強調しようとしていました。それ自体は確かに適切であり、その限りにおいては正しいものです。しかし、後のカルヴァンの追随者たちは、この原理を行き過ぎた形で適用し、イエスの犠牲が(人類の大多数が彼を拒んできたにもかかわらず)すべての人に救いの道を開いているという事実を、人間の応答と切り離して理解するようになり、救いにおける神の側面のみを受け入れる一方で、人間が神によって、神を選ぶか神に背くかを選択

する存在として創造されたという決定的な点を、ほとんど無視するに至りました<sup>6</sup>。より最近では、ハイパー・カルヴァン主義のこの一つの誤った側面が、「永遠の保障」という名のもとに、福音派の中で積極的に採用されてきました。この誤った見解の解釈によれば、「一度救われたならば」、信者は決して自分の救いを失うことがない（「いつまでも救われている」ということになります）。

…しかし、**最後まで耐え忍ぶ者は救われる**。(マタイ 10 章 22 節)

(1) 兄弟たちよ。わたしが以前あなたがたに伝えた福音、あなたがたが受け入れ、それによって立ってきたあの福音を、思い起してもらいたい。(2) **もし**あなたがたが、いたずらに信じないで、わたしの宣べ伝えたとおりの言葉を固く守っておれば、この福音によって救われるのである。(第一コリント 15 章 1-2 節)

(22) しかし今では、御子はその肉のからだにより、その死をとおして、あなたがたを神と和解させ、あなたがたを聖なる、傷のない、責められるところのない者として、みまえに立たせて下さったのである。(23) **ただし** < NIV では "if" (もし) >、あなたがたは、ゆるぐことがなく、しっかりと信仰にふみとどまり、すでに聞いている福音の望みから移り行くことのないようにすべきである。この福音は、天の下にあるすべての造られたものに対して宣べ伝えられたものであって、それにこのパウロが奉仕しているのである。(コロサイ 1 章 22-23 節)

(11) 次の言葉は確実である。「**もし**わたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。(12) **もし**耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。**もし**彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう。(13) たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」。(第二テモテ 2 章 11-13 節)

**もし**最初の確信を、最後までしっかりと持ち続けるならば、わたしたちはキリストにあずかる者となるのである。(ヘブル 3 章 14 節)

聖書は、信者がいったん救われた後であれば、何を考え、何を語り、何を行っても罰を受けることはなく、キリストからあらゆる点で完全に離れ去ったとしても、最終的にはなお救われるのだ、という考えが、きわめてばかげたものであることを、無数の箇所と

---

<sup>6</sup> これらの問題については、[聖書の基礎第 4 部 B『救済論』](#)において詳しく論じられています。

例によって、これ以上ないほど明確に示しています。もしそのようなことが本当であるなら、なぜ新約聖書には、危険な行動に対する警告や、道を踏み外した者たちに悔い改めを促す呼びかけ、また正しい者たちに忍耐を求める勧めが、これほど多く記されているのでしょうか。もしそのようなことが本当であるなら、救われた後の行いが何であれ問題にならないのであれば、なぜ私たち信者は、救われた後もなお地上に留められているのでしょうか。そしてもし、不信仰という以前の状態に戻る可能性がまったくないのであれば、私たちの信仰の真実性と強さは、いったいどのようにして試され得るのでしょうか。

(13) これらの人はみな、[なお歩み続けながら]信仰をいだいて死んだ。まだ約束のもの[の成就]は受けていなかったが、[生きている間に]はるかにそれを望み見て喜び、そして、[いわば]地上では旅人であり寄留者であることを、[全世界に]自ら言いあらわした。(14) そう[信仰を]言いあらわすことによって、彼らがふるさとを求めていることを示している。(15) もしその出てきた所のことを[彼らが心で]考えていた(慕っていた)なら、**帰る機会は[十分]あったであろう。**(16) しかし実際、彼らが望んでいたのは、もっと良い、天にあるふるさとであった。だから神は、彼らの神と呼ばれても、それを恥とはされなかった。事実、神は彼らのために、都(すなわち、新しいエルサレム)を用意されていたのである。(ヘブル 11 章 13-16 節)

(20) 彼らが、主また救主なるイエス・キリストを知ることにより、この世の汚れからのがれた後、[これらの弱い信者たちが]またそれに巻き込まれて[霊的に]征服されるならば、彼らの後の状態は初めよりも、もっと悪くなる。(21) 義の道を心得ていながら[すなわち、キリストへの信仰を受け入れた後で]、自分に授けられた聖なる戒めにそむくよりは、**むしろ義の道を知らなかった方がよい。**(22) ことわざに、「犬は自分の吐いた物に帰り、豚は洗われても、また、どろの中にくろがって行く」とあるが、彼らの身に起ったことは、そのとおりである。(第二ペテロ 2 章 20-22 節)

常識や論理、神学をひとまず脇に置いたとしても、聖書は、信者が救われた後に決して信仰を捨てることはない、という考えを、いかなる形でも支持していません。実際、そのようなことは起こり得るのであり、この点については、主ご自身が非常にはっきりと語っておられます。

岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受け入れるが、根が無いので、**しばらくは信じていても、試練の時が来ると、信仰を捨てる人たちのことである。**(ルカ 8 章 13 節)

最終的に救われるのは、信者、すなわち生涯の終わりまで信仰を保ち続ける者たちだけです。不信者は救われません。たとえ、上で述べた岩地にまかれた種のように、しばらくの間は浅くイエス・キリストを受け入れたとしても、同様です。

(17) 神が御子を世につかわされたのは、世をさばくためではなく、御子によって、この世が救われるためである。(18) 彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。(ヨハネ 3 章 17-18 節)

最終的な救いに必要な忍耐というこの重要な真理を誤解していたとしても、過去においては、その真理を受け入れなかった多くの人々にとって、致命的な結果をもたらさなかった場合もありました。というのも、彼らは実際には、それでもなお信仰を保ち続けたからです。しかし、このことが将来においても必ずしも当てはまるとは限りません。大艱難の時には、妥協へと向かわせる圧力はきわめて強大となり、そのような妥協が救いを危うくすることはないという考えは、そうすることへの恐るべき誘惑となるでしょう。しかし、聖書は、そのような妥協が信仰の死を意味し、そうした恐るべき取引を行うかつての信者たちにとって、救いの喪失を伴うものであるという事実について、少しの疑いも残していません。

(9) ほかの第三の御使が彼らに続いてきて、大声で言った、「おおよそ、獣とその像とを拝み、額や手に刻印を受ける者は、(10) 神の怒りの杯に混ぜものなしに盛られた、神の激しい怒りのぶどう酒を飲み、聖なる御使たちと小羊との前で、火と硫黄とで苦しめられる。(11) その苦しみの煙は世々限りなく立ちのぼり、そして、獣とその像とを拝む者、また、だれでもその名の刻印を受けている者は、昼も夜も休みが得られない。(黙示録 14 章 9-11 節)

そして、「一度救われたなら常に救われている」という考えは、パウロの時代のエルサレムの信者たちにとっても、決して真実ではありませんでした。彼らは、自分たち自身の患難に直面しようとしていたからです。それは、多くの点で、やがて私たちの時代に到来する患難と類似しており、敵の軍勢がエルサレムを取り囲み、主のことばに従わなかった信者たちは、内側では不信仰な熱心党に、外側では彼らを完全に滅ぼそうとする手強い異教徒に挟まれることになったのです。

(20) エルサレムが軍隊に包囲されるのを見たならば、そのときは、その滅亡が

近づいたとさとりなさい。(21)そのとき、ユダヤにいる人々は山へ逃げよ。市中にいる者は、そこから出て行くがよい。また、いなかにいる者は市内にはいってはいけない。(22)それは、聖書にしるされたすべての事が実現する刑罰の日であるからだ。(23)その日には、身重の女と乳飲み子をもつ女とは、不幸である。地上には大きな苦難があり、この民にはみ怒りが臨み、(24)彼らはつるぎの刃に倒れ、また捕えられて諸国へ引きゆかれるであろう。そしてエルサレムは、異邦人の時期が満ちるまで、彼らに踏みにじられているであろう。(ルカ 21 章 20-24 節)

私たちは、背教という問題について、これまでも何度も検討してきました<sup>7</sup>。ここでは、信仰は、適切な運動と栄養が与えられなければ萎縮してしまう筋肉にたとえられる、という点を述べるにとどめます。主が先に引用した節(ルカ 8 章 13 節)でなさっているように、信仰をみことばの種から生えた植物にたとえるなら、十分な水やりと成長、すなわち深く根を張ることがなければ、みことばの種が生み出した信仰の植物は、反対、誘惑、失望、あるいはいかなる深刻な患難の熱の下でも枯れてしまい、極端な場合には完全に枯死してしまいます。そして、その植物が表している信仰そのものもまた、消え去ってしまうことがあります。実際、信仰生活がある程度長く送ってきた私たちの多くは、かつては主に対して「熱心であった」(黙示録 3 章 15-16 節参照)信者でありながら、今では不信者と見分けがつかなくなってしまう多くの例を知っているでしょう。私たち信者には、かつての信者が今もなお信仰の火花を残しているかどうかを見分けることはできないとしても、そのような人の霊的状态がきわめて危険で、極度に不安定であり、残っているかもしれないわずかな火花を消してしまうのに、ほとんど追加の圧力を必要としないほどである、ということは、確信をもって言うことができます。パウロがこの書簡を書いた際に念頭に置いていたエルサレムの多くの人々の状況も、まさにそのようなものでした。

(23)主なる神は言われる、わたしは悪人の死を好むであろうか。むしろ彼がそのおこないを離れて生きることを好んでいるのではないか。(24)しかし義人がもしその義を離れて悪を行い、悪人のなすもろもろの憎むべき事を行うならば、生きるであろうか。彼が行ったもろもろの正しい事は覚えられない。彼はその犯したとがと、その犯した罪とのために死ぬ。(エゼキエル 18 章 23-24 節)

[わたしはすでに決断しました。]すなわち、主イエスの名によって、あなたがたもわたしの霊も共に、わたしたちの主イエスの権威のもとに集まって、彼の肉が

---

<sup>7</sup> 特に、[聖書の基礎 第3部 B:罪論 .IV.6.1.「背教」](#)および、[「ペテロ #27:信仰を脅かす三つの誤った教理」](#)を参照してください。

滅ぼされても、その霊が主のさばきの日に救われるように、彼をサタンに引き渡してしまったのである。(第一コリント 5 章 4-5 節)

(16) もしだれかが死に至ることのない罪を犯している (すなわち、完全な離反ではなく、逸脱をしている) 兄弟を見たら、神に[兄弟のための赦しを]願い求めなさい。そうすれば神は、死に至ることのない罪を犯している人々には、いのちを賜わらう (すなわち、赦しと救出がもたらされる)。死に至る罪がある。これについては、願い求めよ、とは言わない。(17) 不義はすべて、罪である。しかし、死に至ることのない罪もある (すなわち、一時的な逸脱であり、告白され悔い改められるなら、死に至る罪とはならない)。

上に挙げた節にあるとおり、背教に代わるもう一つの結末は、死に至る罪、すなわち、主に対する反逆を悔い改めることを拒みつつも、自分の信仰を捨てることも拒む信者に対して下される、懲罰的な死です。その人は、信仰にしがみついているため、背教するわけではありませんが、同時に、父なる神が愛をもって与え続けておられる増し加わる神よりの懲らしめに応答することを拒むため ([ヘブル 12 章 3-17 節](#))、上に引用した例に見られるように、主はこのような悪しき証しがいつまでも続くことをお許しにはなりません。疑いなく、当時のエルサレム教会には、この二種類の人々がともに存在していました。すなわち、一方では、同調への圧力や伝統の引力によって、信仰が消されかけている瀬戸際にあった人々がいましたが、他方では、律法に立ち返ったことが誤りであると何らかの形で認識しながらも、自分たちが経験していた増し加わる神よりの懲らしめにもかかわらず、それを悔い改めようとしなかった人々もいたのです。エルサレム教会の大多数によるこの恐るべき転落の集団的結果は、彼らが、本来であれば自分たちの家族、都市、そして国家を保つことができたはずの「塩」であるべきところ、「味」を失ってしまったことでした ([マルコ 9 章 49-50 節](#); [ルカ 14 章 34-35 節](#))。

あなたがたは、地の塩である。もし塩のききめがなくなったら、何によってその味を取りもどされようか。もはや、なんの役にも立たず、ただ外に捨てられて、人々にふみつけられるだけである。(マタイ 5 章 13 節)

(28) イエスは女たちの方に振りむいて言われた、「エルサレムの娘たちよ、わたしのために泣くな。むしろ、あなたがた自身のため、また自分の子供たちのために泣くがよい。(29)『不妊の女と子を産まなかった胎と、ふくませなかった乳房とは、さいわいだ』と言う日が、いまに来る。(ルカ 23 章 28-29 節)

## II. 翻訳

(1)それゆえ、兄弟たちよ、[今や]きよめられ、天から[来ている]召しにあずかっている者たちであるあなたがたは、私たちが告白する、[わたしたちを救うために]遣わされた方、またその救いの大祭司である方、[すなわち]イエスに、心を留めていなさい。(2)この方は、ご自分を立てられた方に忠実であられた。それは、モーセもまた、自分の「家」(すなわち、責任の領域)全体において忠実であったのと同じである。(3)この方[イエス・キリスト]は、家そのものよりも、家を建てた者のほうが大きな誉れを受けるように、モーセよりもさらに大きな栄光に値する方である。(4)すべての家はだれかによって建てられるが、すべてのものを建てられた(すなわち、創造された)のは神である。(5)さて、モーセは、後に語られること[真理]についての証しとして、自分の家の中で、しもべとして忠実であったが、(6)キリストは、その家の上に立つ御子として忠実であられた。その家とは、もし私たちが、誇りとする希望を、終わりまでしっかりと保ち続けるなら、私たち自身のことである。(7)それゆえ、聖霊が言われるとおりに。「きょう、もし御声を聞くなら、(8)荒野での試みの時に、反逆においてしたように、あなたがたの心をかたくなにすることはならない。(9)そこでは、あなたがたの先祖が、わたしを試み、わたしを試し、[自分たちのための]わたしのわざを見ていながら、(10)四十年の間そうしたのである。それで、わたしはこの世代に憤り、[自分自身に]こう言った、『彼らはいつも心の中でさ迷い、わたしの道を知らなかった』。(11)それゆえ、わたしは怒って誓った、『彼らは決して、わたしの安息に入ることはない』。(12)兄弟たちよ、あなたがたのうちのだれも、生ける神から離れ去る(字義的には「背教する」)不信仰の悪い心が生じることのないように、気をつけなさい。(13)むしろ、「きょう」と呼ばれている間(すなわち、私たちがなおこの世に留まっている間)、日ごとに互いに励まし合いなさい。それは、あなたがたのうちのだれも、罪の欺きによって[心が]かたくなにされてしまうことがないためである。(14)というのは、私たちは、もし最初の確信[すなわち、信仰]を、終わりまでしっかりと保ち続けるなら、キリストにあずかる者となっているからである。(15)「きょう、もし御声を聞くなら、荒野での試みの時の反逆においてしたように、あなたがたの心をかたくなにすることはならない」と言われているとおりにである。(16)さて、[主の言葉を]聞いていながら神を怒らせたのは、だれであったか。それは、モーセに率いられてエジプトを出た者たちすべてではなかったか。(17)また、四十年の間、神が憤られたのは、だれであったか。それは、罪を犯し、荒野で倒れて死んだまさにその人々ではなかったか。(18)さらに、神が、だれに対して、ご自分の[約束された場所]安息に入らせないと誓われたのか。それは、神を信じようとしなかった者たちではなかったか。(19)こうして私たちは、彼らが不信仰(すなわち、信仰の欠如)のゆえに、この[安息の]場所に入ることができなかつたことがわかる。(へブル3章1-19節)

### III. 要約と意識

イエスは、(いけにえを含む律法を仲介した)モーセよりも優れています。また、不信仰と反逆に陥った出エジプトの世代の過ちを避ける必要があります。

それゆえ、動物の血ではなくキリストの血によってきよめられたあなたがた、地上の集会よりもはるかに優れている、キリストの天の集会、すなわちその教会への選びにあずかる者となったあなたがたは、今なおそこに留まろうとして妥協している地上の集会ではなく、永遠のいのちに対するあなたがたの確信が、いったいだれに基づいているのかを、注意深く考えなさい。それは、まことの大祭司、父によって遣わされ、律法を成就し、それに代わる方、すなわち主イエス・キリストです。イエスは、象徴にすぎない犠牲を示す「家」を確立したモーセと同様に、まことの犠牲を成し遂げるためにご自分を遣わされた父に対して、完全に忠実であることを示されました。しかし、家を備える者が家そのものよりも優れているのと同じように、キリストがなされたことにおけるその栄光は、明らかにモーセのそれよりもはるかに優れています。というのも、キリストの犠牲は、モーセの律法が単に象徴していたにすぎない、神の真の目的を成就するものだからです。モーセは、いわばその象徴的な家に仕えるしもべにすぎませんでした。キリストは、その家を治める御子です。そして私たちこそが、その家、すなわち、御血によって買い取られた教会なのです。ただし、それは、私たちが救いの確信を、終わりまで大胆に、堅く保ち続けるならば、という条件のもとにおいてです。

だからこそ、私はあなたがたのことを心配しているのです。あなたがたは、律法が最初に与えられた出エジプトの世代を思い起こさせます。聖書は、彼らがそうしたように、神に対して心をかたくなにし、四十年の間、絶えず神を試み続けた結果、ついに主が怒りのうちに、彼らは決してご神の「安息」に入ることはないと言われたことを警告しています(詩篇 95 篇 7-11 節)。それゆえ、あなたがたのうちのだれ一人も、同じような行動によって、生ける神から離れ去る不信仰の悪い心を抱くことがないように、気をつけなさい。むしろ、罪の惑わしによってこのように心がかたくなになることを、細心の注意を払って避けるよう、互いに励まし合うべきです。そして、「きょう」と呼ばれている間、すなわち、主の再臨を待ちながら、私たちがなおこの世に留まっている間、そのようにし続けるべきです。というのも、私たちはキリストのからだの一部となり、復活のときにそれに伴うすべての祝福にあずかることになるからです。ただし、それは、私たちがその確信と信仰を、終わりまで堅く保ち続けるならば、という条件のもとにおいてです。

さて、先に引用した詩篇において、「きょう、もし御声を聞くなら、あなたがたの心をかたくなにしてはならない」([詩篇 95 篇 7-8 節](#))と言われているとき、実際に、聞きながらもその後で主に対して心をかたくなにしたのは、誰だったのでしょうか。それは、モーセに率いられてエジプトを出た世代全体ではありませんでしたか。また、主が四十年の間、怒られたのは、誰に対してでしたか。それは、主に対して罪を犯した同じ反逆者たちであり、その結果として、その骨が荒野にさらすことになった者たちではありませんでしたか。さらに、主が「安息」に入らせないと誓われたのは、主に従わず、主を信じなかった者たち以外の誰であったのでしょうか。私たちは、あなたがたのその先祖たちが、主が約束された「安息」に入ることができなかったのは、まさに彼らの信仰の欠如のゆえであり、その信仰の欠如が、彼らの行いによって裏づけられていたこと、そしてそれが、あなたがたの現在の行動と同じであることを、はっきりと見ているのです。

## IV. 節ごとの注解

### 一節一二節

(1)それゆえ、兄弟たちよ、[今や]きよめられ、天から[来ている]召しにあずかっている者たちであるあなたがたは、私たちが告白する、[わたしたちを救うために]遣わされた方、またその救いの大祭司である方、[すなわち]イエスに、心を留めていなさい。(2)この方は、ご自分を立てられた方に忠実であられた。それは、モーセもまた、自分の「家」(すなわち、時代区分の責任の領域)全体において忠実であったのと同じです。(ヘブル 3 章 1-2 節)

### きよめられた者(聖徒):

これは、パウロがあいさつの中で通常用いる呼称です([第一コリント 1 章 2 節](#); [第二コリント 1 章 1 節](#); [エペソ 1 章 1 節](#); [ピリピ 1 章 1 節](#); [コロサイ 1 章 2 節](#); [第一ペテロ 1 章 2 節](#)参照)。しかしここでは、「兄弟たち」を意味する adelphoi (アデルフォイ/ἀδελφοί)という語とともに用いられ、すでに述べられたことに基づいて(すなわち、「それゆえ」または「だから」[先に述べられたことに基づいて]、ギリシヤ語接続詞 οὖν (ウン/οὖν))、議論を再開し、それを新たな段階へと進めるための手段として用いられています。パウロはすでに、エルサレムの信者たちが、厳密に言えば「聖徒」であり、聖霊のバプテスマによって神によって取り分けられ、特別にイエス・キリストに属する者とされたという事実に注意を向けていました。

実に、きよめるかたも、きよめられる者たちも、皆ひとりのかた[御父]から出ている。それゆえに主[キリスト]は、彼らを兄弟と呼ぶことを恥とされない。(へブル 2 章 11 節)

私たちは、十字架におけるキリストの聖別の働きによって、キリストにある兄弟姉妹なのです。それは、自分自身の努力や、いかなる外的な聖さの制度によるのではなく、「御霊による聖別の働きによって」(第一ペテロ 1 章 2 節) 聖なる者とされ、また、キリストに対する将来の私たちの信仰を神があらかじめ知っておられたことによって、この栄誉のために予定され(第二テサロニケ 2 章 13 節; 第一ペテロ 1 章 2 節)、さらに、救いの時に聖霊のバプテスマによって、私たちがキリストとの結合に入れられたとき、立場的に聖なる者、「聖別された者」とされたのです(ローマ 1 章 7 節, 16 章 2 節; 第一コリント 1 章 2 節, 1 章 30 節, 6 章 11 節; エペソ 3 章 18 節)。このように、すべての信者は、神の目には「聖徒」です。すなわち、キリストに属する者として**神が**私たちを聖なる者と見なしておられるがゆえに、また、聖霊のバプテスマと内住によって、**神が**私たちをこの世の俗なるものから取り分けておられるがゆえに、聖なる者であり、取り分けられた者なのです。

神[御父]は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった。(コロサイ 1 章 13 節)

律法主義が、聖さのイメージを作り出し、そこに功績を帰そうとするのに対して、私たちの聖さは恵みの問題であり、イエス・キリストを救い主として受け入れるとき、まったく功績によらない形で受け取るものです。

これは、罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流すわたしの契約の血である。(マタイ 26 章 28 節)

古い契約、すなわち律法の下では、ほとんどすべてのものが、文字どおりの動物の血によって清められ、浄化されていました(へブル 9 章 22 節; [へブル 9 章 7 節](#)参照)。しかし私たちは、イエス・キリストの血によって、すなわち、十字架において私たちの罪のために死なれたその働きによって、清められ、浄化され、そして聖別されました。これは、神のご計画におけるすべての事柄の土台であり、律法のいけにえの動物の血は、その唯

一の真のいけにえを予表するかたちで、ただ指し示していたにすぎなかったのです<sup>8</sup>。

イエス・キリストを信じるすべての信者は、これらのことを理解しているべきであり、キリストの奥義の真理が最初にもたらされた人々であるエルサレム教会は、ほとんどの人々よりも、これらのことをよりよく理解しているべきでした。律法のいけにえによって、持続する聖別がもたらされることはありません。

(3)律法が[罪深い人間の]肉により無力になっているためになし得なかった事(すなわち、罪の問題を解決すること)を、神はなし遂げて下さった。すなわち、御子を、[罪を贖う目的のため]罪の肉の形で罪のためにつかわし、[キリストの]肉において[すべての]罪を罰せられたのである。(4)これは律法の要求[する完全な義]が、[罪深い]肉によらず霊によって歩くわたしたち(すなわち、信者)において、満たされるためである。(ローマ 8 章 3-4 節)

そして、これがエルサレムにおける問題でした([ヘブル 6 章 4-9 節](#), [10 章 26-31 節](#) 参照)。彼らはこれらのことを知っていながら、私たちの救い主の到来と、私たちのための十字架での死によって、何も変わっていないかのように行動していました。確かに、これらの信者たちは、立場的には、聖別され、聖徒であり、聖なる者でした。しかし、すべての信者は、救いの後に聖なる生活を生きるように召されており、イエス・キリストにあるがゆえに私たちが持っている完全な聖さに対応する、実際の生活における聖さを追い求めるように求められているのです([ヘブル 12 章 14 節](#))。

神のみこころは、あなたがたが清くなることである。(第一テサロニケ 4 章 3 節前半)

(14)従順な子供として、[以前の]無知[すなわち真理についての無知]であった時代の欲情に従わず、(15)むしろ、あなたがたを召して下さった聖なるかたにならって、あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい。(16)聖書に、「わたしが聖なる者であるから、あなたがたも聖なる者になるべきである」と書いてあるからである。(第一ペテロ 14-16 節)

この実生活における聖別を追い求めることなしには、「だれも主を見ることはできません」([ヘブル 12 章 14 節](#))。律法の規定、儀式、いけにえに従うことによって儀礼的

---

<sup>8</sup> [聖書の基礎 第 4 部 A 『イエス・キリストについての研究』 II.4. 「キリストの血」](#) を参照してください。

な聖さを追い求めることは、エルサレム教会の実際の聖別に寄与してはいませんでした。むしろ、それを妨げていたのです。

人の義とされるのは律法の行いによるのではなく、ただキリスト・イエスを信じる信仰によることを認めて、わたしたちもキリスト・イエスを信じたのである。それは、律法の行いによるのではなく、キリストを信じる信仰によって義とされるためである。なぜなら、律法の行いによっては、だれひとり義とされることがないからである。(ガラテヤ 2 章 16 節)

ここで、そしてこのシリーズ全体を通してそうであるように、私たちは、パウロに同意して一緒にうなずき、これらの迷い出た信者たちに対して落胆を覚えるかもしれませんが、同時に、差し迫った艱難期を前にしている私たち自身の国についても考え、多くの類似点があることに目を留めるべきです。パウロは、エルサレム教会全体の完全な回復を夢見ることはできましたが、より現実的であったのは、十分な数の前向きな信者たちが、この妥協を捨てて真理への焦点を新たにするという呼びかけに応じ、彼らの国のための塩となることでした。いずれにせよ、このヘブル書簡という、愛に満ちた心からの労苦に応答した人々にとっては、今、後悔はなく、またキリストの裁きの座においても後悔はないでしょう。それは、この手紙を受け取った後に続いた困難な年月の間に、個人的にどのような出来事が起こったとしても同様です。そして、同じことが、私たちにとっても、今も、そして将来も、真実なのです。

#### 天から[来ている]召しにあずかっている者たち：

「分け前にあずかる者たち(英語で: partakers)」と訳されている言葉は、ギリシヤ語 メトコス(μέτοχος / metochos)であり、これは、他の人々と共通して、ある事柄に対して具体的で実質的な分け前を持つこと、ある事柄に分を持つ者として、その事柄の本質的な構成員であること、すなわち、共同の担い手、パートナーであることを意味します(ルカ 5 章 7 節; [ヘブル 1 章 9 節](#))。このヘブル書簡の中で、私たちは、イエス・キリストご自身にあずかる者であると言われており([ヘブル 3 章 14 節](#))、また、聖霊にあずかる者であり([ヘブル 6 章 4 節](#))、さらに、父なる神の愛に満ちた懲らしめにあずかる者であるとも言われています([ヘブル 12 章 8 節](#))。本箇所において、パウロは、この遅れて置かれたあいさつの中で、受取人たちを、「召し」にあずかる者、すなわち、分け前を持つ者、共同の担い手、参加者として呼びかけており、そのことによって、私たちの召しの重要性と、それが実質的で具体的な性質を持つものであること、また、私たちがそれをしっかりと保持していることの両方を強調しています。この「召し」とは、もちろん、世俗的な職業への召しを指すのではなく、神が私たちをこの世から救いへと

召し出されることを指しています<sup>9</sup>。

招かれる者[すなわち救いへと招かれる者]は多いが、選ばれる者[すなわち救われるために選ばれる者]は少ない」。(マタイ 22 章 14 節)

(28)神を愛する者たち、すなわち御計画に従って召された者たちのためには、神がすべてのことを共に働かせて益ととしてくださることを、私たちは知っている。(29)神は、あらかじめ知っておられた者たちを、御子のかたちと同じ姿にあずかるように定められた(すなわち、前もって定められた)。それは、御子が多くの兄弟[姉妹]の中で長子となられるためである。(30)そして、あらかじめ定められた者たち(すなわち、前もって定められた者たち)を、神はまた[救いへと]召し、召された者たちをまた義とし(すなわち、キリストへの信仰によって義とし)、義とされた者たちをまた栄光にあずからせられた(すなわち、将来の復活と永遠のいのちである)。(ローマ 8 章 28 節/NIV 訳)

上の最初の箇所が明らかにしているように、福音を聞く機会が与えられたすべての人がそれに応答するわけではありません(また、応答した人すべてが「最後まで耐え忍ぶ」わけでもありません：[マタイ 10 章 22 節](#); [ヘブル 3 章 6 節](#), [3 章 14 節](#))。しかし、上の第二の箇所が示しているように、「召し」とは、パウロにとって神のご計画全体を指す簡潔な表現です。すなわち、「御計画／御目的に従って召された」私たちは、私たちのために「すべてのことを共に働かせて益とする」神の働きの受益者であり、あらかじめ知られ(永遠の過去において神によって知られており)、予定され(神の完全な御計画の中に置かれ)、召され(救いへと導かれ)、義とされ(信仰によって神ご自身の義を与えられ)、そして栄光にあずかるように定められています(救い主が私たちのために来られるときに復活し、報いを受けることです)。これが、イエス・キリストを信じる私たちすべてが共有している「天からの召し」であり、私たちは、神のご計画のこの「最終局面」を見据えて生きる責任を負っています。すなわち、私たちの復活を待ち望み、キリストの勝利の結果として与えられる分け前を待ち望み([詩篇 68 篇 18 節](#); [イザヤ 53 章 12 節](#); [エペソ 4 章 7-10 節](#))、さらに、千年間にわたって行われるキリストの完全な王国統治にあずかることを待ち望むことです([第一コリント 4 章 8 節](#); [第二テモテ 2 章 12 節](#); [黙示録 1 章 6 節](#), [2 章 26-27 節](#), [3 章 21 節](#), [20 章 4-6 節](#))。これこそが、私たちがそのいけにえにあずかる権利を持つ「祭壇」なのです([ヘブル 13 章 10 節](#); [第一コリント 9 章 13 節](#)参照)。この世的な代用品を受け入れること、たとえそれが、もともとキリストとの関係について教えるために神によって定められていた、今や役割を終えた律法のも

---

<sup>9</sup> BB 4B『救済論』第1部 2.b 節「予定、召し、選び」を参照してください。

のだとしても、それは実に割の合わない取引です。エルサレムの会堂のように、長く続かないこの世的な所属や結びつきを求めるのではなく、これらの信者たちはむしろ、宇宙の歴史の中で最も卓越した組織、すなわち、キリストの天にある集会、キリストのからだ、キリストの花嫁、キリストの教会、すなわちエクレシア(ἐκκλησία/ekklesia: 市民・戦士の集会)への召しと選びに焦点を当てるべきでした。それは、エルサレムの信者たちが、そこに留まるために妥協していた地上の集会よりも、はるかにすぐれたものなのです。

(12)光のうちにある聖徒たちの特権にあずかるに足る者とならせて下さった父なる神に、感謝することである。(13)神は、わたしたちをやみの力から救い出して、その愛する御子の支配下に移して下さった。(コロサイ1章12-13節)

#### イエスに、心を留めていなさい：

愛する救い主に目を留め続けることは、すべての信者が身につけなければならない、きわめて重要な実践です。ここで用いられている動詞は命令法であり、これは命令であることを意味しています<sup>10</sup>。もし私たちが、日々の歩みにおいて、常にイエス・キリストを思考の最前面に置き、彼についてすべてを語っている書かれた御言葉、すなわち聖書の真理を学ぶことを通して、日ごとに心の中で主に近づいているなら、すなわち、肉となって現れた真理そのものである、生ける御言葉である方(ヨハネ14章6節；[第一コリント2章16節](#)；[黙示録19章13節](#))に近づいているなら、私たちは、だらしのないクリスチャン生活から生じる妥協や、その他の霊的失敗に、知らず知らずのうちに巻き込まれることは、ほとんどなくなるでしょう。この「キリストに心を占められること」は、聖霊の働きなしには不可能です。すなわち、私たちが真理を聞くときにそれを教え、思い起こさせ、また、私たちが導かれることを望むときに、それを適用するのを助けてくださる方である聖霊の働きなしには不可能なのです([ローマ8章12-17節](#)；[ガラテヤ5章16-25節](#)；[エペソ5章15-21節](#))。

わたしは常に主をわたしの前に置く。主がわたしの右にいますゆえ、わたしは動かされることはない。(詩篇16篇8節)

わたしにとっては、生きることはキリストであり、死ぬことは益である。(ピリピ1章21節)

---

<sup>10</sup> [BB 6A『ペリパテオロジー：クリスチャンの歩み』第I部B.6節「キリストに焦点を当てる」](#)を参照してください。

信仰によって、彼[モーセ]は王の憤りをも恐れず、エジプトを立ち去った。彼は、見えないかたを見ているようにして(すなわち、心で見えないイエス・キリストに留め続けて)、忍びとおした。(ヘブル 11 章 27 節)

こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。彼は、自分の前におかれている喜びのゆえに、恥をもいとわないうで十字架を忍び、神の御座の右に座するに至ったのである。(ヘブル 12 章 1-2 節)

あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見えてはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。(第一ペテロ 1 章 8 節)

むしろ、心の中で、[何よりも勝る方として]キリストを主としてあがめなさい。(第一ペテロ 3 章 15 節前半/NIV 訳)

私たちは、今現在は、肉体的には愛する主を見ることはできませんが、御霊においては、常に主に目を留め続けるべきです。

イエスは彼に言われた、「あなたはわたしを見たので信じたのか。見ないで信ずる者は、さいわいである」。(ヨハネ 20 章 29 節)

### 遣わされた方：

ギリシヤ語の動詞アポステロ(*apostellō*) は「遣わす」「派遣する」という意味であり、名詞アポストロス(*apostolos*) は文字どおり「遣わされた者」「使節」「使徒」を意味します。新約聖書においてこの語は、時に宣教師的働きをする者にも用いられます(例：[ローマ 16 章 7 節](#))<sup>11</sup>。しかし多くの場合、「使徒」とは特別な意味での使徒、すなわち、特別な賜物と権威を与えられた十二人(イスカリオテのユダを除く元の十一弟子にパウロを加えた者たち; 参照。 [第一コリント 12 章 28 節](#); [エペソ 4 章 11-12 節](#); [黙示録 21 章 14 節](#))を指します。彼らは、御霊の時代、すなわち教会時代における教会の初期

---

<sup>11</sup> [BB 6B: 教会論\(Ecclesiology\) 第 II 章 C 節 2 項 3 目「宣教と伝道\(Missions and Evangelism\)」](#)を参照。

組織化のために、特別な権威を授けられていました。<sup>12</sup>

(19)そこであなたがたは、もはや異国人でも宿り人でもなく、聖徒たちと同じ国籍の者であり、神の家族(すなわち、教会)なのである。(20)またあなたがたは、使徒たちや預言者たちという土台の上に建てられたものであって、キリスト・イエスご自身が隅のかしら石である。(エペソ 2 章 19-20 節)

宣教師とは、ある地方教会の自然な影響圏を越えて神の御言葉を携えて行くために「遣わされる者」です。異邦人世界への拡大期に教会組織の形成を委ねられた「小羊の十二使徒」([黙示録 21 章 14 節](#))と、より一般的な宣教者に共通する点は、地方教会の枠を超えた場所で、委任された奉仕を行うという役割にあります。ただし使徒の場合には、当時の地上の教会全体に対する特別な権威が伴っていました。十二使徒、特にパウロは、この使命を人間の組織からではなく、主イエス・キリストご自身から直接授けられました。

すると、主がわたしに言われた、『行きなさい。わたしが、あなたを遠く異邦の民へつかわす(エクサポステロ/exapostellō)のだ』。(使徒行伝 22 章 21 節)

本箇所主イエスが「遣わされた方」と呼ばれるのは、父なる神によって遣わされたすべての使徒の**使徒**だからです。すなわち、罪と死と裁きから墮落した人類を贖い出すという、あらゆる使命の中で最も偉大な使命を帯びて来られた方です。これは、神の御計画そのものを体現する**使命**であり、「ロゴス」、すなわち御言葉である方が肉となって来られ、父によってこの世に遣わされ、私たちに墓と火の池から救うために成し遂げられた働きです。

あなたがたを受けいれる者は、わたしを受けいれるのである。わたしを受けいれる者は、わたしをおつかわしになった(アポステロ)かたを受けいれるのである。(マタイ 10 章 40 節)

神がおつかわしになった(アポステロ)かたは、神の言葉を語る。神は聖霊を限りなく賜うからである。(ヨハネ 3 章 34 節)

あなたがわたしを世につかわされた(アポステロ)ように、わたしも彼らを世につかわし(アポステロ)しました。(ヨハネ 17 章 18 節)

---

<sup>12</sup> [BB 6B:教会論\(Ecclesiology\)第II章C節1項a「使徒\(Apostles\)」](#)を参照。

わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった(アポステロ)。ここに愛がある。(第一ヨハネ 4 章 10 節)

#### 大祭司:

私たちはすでにイエス・キリストの大祭司職について多くのことを述べてきましたが<sup>13</sup>、これはヘブル書全体の終わりに至るまで続く主要な主題の一つであるため、今後さらに多くの説明がなされます(例:[ヘブル 4 章 14-15 節](#), [5 章 1 節](#), [5 章 5-6 節](#), [5 章 10 節](#), [6 章 20 節](#), [7 章 11 節](#), [7 章 15 節](#), [7 章 17 節](#), [7 章 20-21 節](#), [7 章 26 節](#), [8 章 1 節](#), [8 章 3-4 節](#), [9 章 7 節](#), [9 章 11 節](#), [9 章 25 節](#), [10 章 21 節](#))。本箇所本文脈において注目すべき点は、ここがこの書簡の受信者に直接語りかける部分の正式な開始箇所であるということです。すなわち、最初の二章で序論的な内容が語られた後に始まる、事実上この手紙の挨拶に当たる部分において、パウロが主の大祭司職をここで取り上げている理由があります。それは、レビ族の祭司によって執り行われていたモーセの律法と、罪のためご自身の死によって救いを成就された永遠の大祭司キリストの血によって確立された新しい契約との間に、できる限り最もはっきりとした対比を示すためでした。後者は、儀式や祭儀や犠牲によってその死を象徴的に示すものではなく、実際に救いを成し遂げたものです。もしこれらの信徒たちがこの事実を理解していたのであれば——そして彼らは当然理解しているべきでしたが——、もはや十字架の現実を過去の予表的な儀式によって示す必要がないにもかかわらず、なぜ彼らが、今や霊的価値を失った以前の礼拝体制へと戻っていたのか、という問いが必然的に生じます。

イエス・キリストは究極の大祭司です([第一テモテ 2 章 5 節](#); [ヘブル 7 章 24-25 節](#); [ヨブ 16 章 20-21 節](#); [イザヤ 53 章 12 節](#)後半; [ヘブル 6 章 19-20 節](#), [9 章 11-12 節](#), [9 章 24 節](#))。そして、私たち信じる者は、今や彼と一つにされています([ヨハネ 14 章 20 節](#), [15 章 1 節](#)以下; [ローマ 16 章 7 節](#); [第二コリント 5 章 17 節](#); [エペソ 2 章 6 節](#), [10 節](#); [ヘブル 3 章 14 節](#), [4 章 14-15 節](#), [7 章 24-25 節](#); [黙示録 1 章 6 節](#), [5 章 9-10 節](#); [第一ペテロ 5 章 14 節](#); [マタイ 28 章 18-20 節](#); [エペソ 3 章 6 節](#); [ヘブル 3 章 1 節](#); [第二ペテロ 1 章 4 節](#))。したがって私たちは、天におられるこのお方に属しているので、もはや地上の祭司を必要としません。また、物理的な神殿も必要としません。なぜなら、「キリストにある者」である私たち自身が、今や地上における神の神殿となっており、その中に聖霊が住んでおられるからです([第一コリント 3 章 16-17 節](#), [6 章 19](#)

<sup>13</sup> 特に、[ヘブル 2 章 17 節](#)「憐れみ深く忠実な大祭司 (A Merciful and Faithful Priest)」を参照。

[節](#); [第二コリント 6 章 16 節](#); [エペソ 2 章 21 節](#); [第一ペテロ 2 章 4-5 節](#)。

(9)さまざまな違った教によって、迷わされてはならない。食物によらず、恵みによって、心を強くするがよい。食物によって歩いた者は、益を得ることがなかった。(10)わたしたちには一つの祭壇がある。幕屋で仕えている者たちは、その祭壇の食物をたべる権利はない。(ヘブル 13 章 9-10 節)

私たち信じる者は、もはや祭司も、動物の犠牲も、神殿も、儀式や祭儀も必要としません。なぜなら、私たちにはイエス・キリストがおられ、私たちは彼に属し、彼と一つにされているからです。そして、彼がすでに来られた今、彼が来られる前にただ彼について語るためだけに存在していたそれらの古いものへ戻ることは、必然的に彼から離れることを意味します。

#### モーセ：

モーセをキリストと比較することは不合理です。イエス・キリストは(受肉以来)神であると同時に人でもあります。モーセは、たとえ彼がこれまで生きて中で最も偉大な信仰者であった可能性があるとしても、単なる人間にすぎません。しかし聖霊は、この修辞的手法を用いることをパウロに許し、それによって、これら多くの信徒たちがどれほど真理から離れてしまっていたかを、彼の読者たち(そして私たち)に示そうとされたのです。このような比較を聞いたとき、主と親しく歩んでいる者であれば、強く異議を唱えるべきです。キリストこそがモーセを創造された方ではなかったのでしょうか。実に、彼は私たちすべてを創造されました。燃える柴の木から始まるイスラエルへの使命の間、モーセと語り続けておられたのはキリストではなかったのでしょうか。確かにそうであり、モーセはその栄光を見ることを切に願っていました。モーセが受け取った律法も、ご自身を表すみことばの一部として、キリストによって書かれたものではなかったのでしょうか。実に、イエス・キリストは生けるみことばであり、ご自身の指によって律法をモーセの石の板に書かれました(例:出エジプト記 31 章 18 節)。さらに、モーセが管理するよう任された「家」も、イエス・キリストの集会、すなわち教会の一部であり、やがてご自身の血によって死から贖われる、彼の花嫁の本質的な一部分ではなかったのでしょうか。確かに、モーセにイエス・キリストによって与えられた律法のすべての犠牲、儀式、祭儀は、ただ彼ご自身のことを語っていました。これらすべてのことを、モーセは理解していました。それにもかかわらず、ヘブル書の受信者たちの多くが、モーセがその大いなる謙遜のうち完全に理解していたこれらの真理から自らを切り離し(民数記 12 章 3 節)、しかもキリストご自身がモーセに与えたモーセの律法についての、人間が作り上げた(しかも大部分が誤った)解釈へと戻ることによって、「モーセに従う」つもりでそうしたというのは、皮肉であり、また悲劇的なことです。

(7)偽善者たちよ、イザヤがあなたがたについて、こういう適切な預言をしている、(8)『この民は、口さきではわたしを敬うが、その心はわたしから遠く離れている。(9)人間のいましめを教として教え、無意味にわたしを拝んでいる』。(マタイ 15 章 7-9 節)

使徒行伝 7 章に記されているステパノの説教を聞いていた群衆と同じように、律法に従っているつもりでいながら、実際にはそれを歪めた自分たちの律法に従っていた律法主義者たちは、しばらくの間は彼の話に耳を傾けていました。しかし、彼が聖書を用いて、彼らが真実においてモーセや預言者たちに従っているどころか、むしろそれらに反対した者たちの側に立っていることを示していると明らかになると、その態度は一変しました。それと同様に、パウロもこの比較という手法を用いることによって、彼の聞き手たちの考えがどれほど誤ったものになってしまっているかを示そうとしているのです。モーセをキリストと同列に置く者は、イエス・キリストのことを何も知らないのです——そして同時に、モーセのことも知らないのです。

### 三節-四節

(3)おおよそ、家を造る者が家そのものよりもさらに尊ばれるように、彼[イエス・キリスト]は、モーセ以上に、大いなる光栄を受けるにふさわしい者とされたのである。(4)家はすべて、だれかによって造られるものであるが、すべてのものを造られた(すなわち、創造された)かたは、神である。

この二つの節によって、パウロは、この不均等な比較の背後にある本当の要点を力強く示しています。すなわち、イエス・キリストは神であるということです。彼とモーセとの間には、そもそも本当の意味で並べて比較できるような関係はありません。イエス・キリストは、万物が存在するようになった創造者、すなわち建設者であり、また万物が彼にあって保たれている方です([ヨハネ 1 章 3 節, 10 節](#); [第一コリント 8 章 6 節](#); [コロサイ 1 章 15-17 節](#); [ヘブル 1 章 2 節, 10 節](#))。一方、モーセは、私たちすべてと同様に、彼によって造られた被造物にすぎません。イエス・キリストは相続者です。モーセは、その相続者に仕えるしもべにすぎません。そしてそれは、私たちについても同じことなのです。

(16)盲目的案内者たちよ。あなたがたは、わざわざいである。あなたがたは言う、『神殿をさして誓うなら、そのままよいが、神殿の黄金をさして誓うなら、果す責任がある』と。(17)愚かな盲目的人たちよ。黄金と、黄金を神聖にする神殿

と、どちらが大事なのか。(18)また、あなたがたは言う、『祭壇をさして誓うなら、そのままでよいが、その上の供え物をさして誓うなら、果す責任がある』と。(19)盲目な人たちよ。供え物と供え物を神聖にする祭壇とどちらが大事なのか。(20)祭壇をさして誓う者は、祭壇と、その上にあるすべての物とをさして誓うのである。(21)神殿をさして誓う者は、神殿とその中に住んでおられるかたとをさして誓うのである。(22)また、天をさして誓う者は、神の御座とその上にすわっておられるかたとをさして誓うのである。(マタイ 23 章 16-22 節)

主が律法学者やパリサイ人たちを厳しく責められたのと同じように、パウロはここで、律法を律法主義的に歪めて解釈し、キリストが来られて自分たちのために死なれたことがなかったかのように振る舞うことによって、彼ら自身が実質的に「神殿よりも金のほうが重要だ」と言い、「祭壇よりも供え物のほうが重要だ」と主張しているのと同じ立場に立っているのだ、という現実を読者を直面させています。すべての議論を超えて明らかなことは、十字架という岩盤の上に据えられた、時代を貫く神の計画全体、すなわち家全体を建て上げられた方が、真理である方、すなわち私たちの愛する救い主イエス・キリストに代わって、それらの真理を示す務めを忠実に果たしたにすぎない者よりも、はるかに偉大であるということです。

### 栄光(Glory)：

モーセは、イスラエルをエジプトから導き出し、出エジプトからメシのヤ到来までの期間、すなわち律法の時代という次のディスペンセーションのための規定を確立するという、主から与えられた使命を果たしたことにおいて、正当にその分の栄光を受けています。しかし、神ご自身が栄光なのです。そして、キリストの永遠の「家」、すなわち教会の栄光は、神の御計画の中で一時的に教会の一部分を規定したにすぎない律法の栄光よりも、はるかに大きいのです。律法のディスペンセーションは、キリストの勝利に基づく現在の御霊のディスペンセーションと比較すると、実質的には栄光を持たないものに等しいのです。

(7)もし石に彫りつけた文字による[律法の]死の務が**栄光**のうちに行われ、そのためイスラエルの子らは、モーセの顔の消え去るべき**栄光**のゆえに、その顔を見つめることができなかつたとすれば、(8)まして霊の務は、はるかに**栄光**あるものではなからうか。(9)もし[律法の]罪を宣告する務が**栄光**あるものだとすれば、義を宣告する務は、はるかに**栄光**に満ちたものである。(10)そして、すでに**栄光**を受けたものも、この場合、はるかにまさった**栄光**のまえに、その**栄光**を失ったのである。(11)もし消え去るべきものが**栄光**をもって現れたのなら、まして永存

すべきもの(すなわち、信者に対する御霊の務め)は、もっと**栄光のあるべきもの**である。(第二コリント 3 章 7-11 節)

同様に、私たちの救い主となられた創造者の栄光は、彼が救うために来られた信徒の集會に仕える、たとえ最も忠実なしもべであったとしても、それと比較されるべきものではありません。

ただ、「しばらくの間、御使たちよりも低い者とされた」イエスが、死の苦しみのゆえに、栄光とほまれとを冠として与えられたのを見る。それは、彼が神の恵みによって、すべての人のために死を味わわれるためであった。(ヘブル 2 章 9 節)

神の光の輝きに満ちた栄光は、私たちの主の神性に固有の本質的属性であると同時に([イザヤ 40 章 5 節](#); [ヨハネ 12 章 41 節](#))、今や栄化されたその人性においてもまた現れている特質です([マタイ 24 章 30 節](#); [25 章 31 節](#); [マルコ 8 章 38 節](#), [9 章 2-8 節](#), [13 章 26 節](#); [ルカ 9 章 26 節](#), [21 章 27 節](#); [ヨハネ 7 章 39 節](#)後半)。

(12)そこでわたしは、わたしに呼びかけたその声を見ようとしてふりむいた。ふりむくと、七つの金の燭台が目についた。(13)それらの燭台の間に、足までたれた上着を着、胸に金の帯をしめている人の子のような者がいた。(14)そのかしらと髪の毛とは、雪のように白い羊毛に似て真白であり、目は燃える炎のようであった。(15)その足は、炉で精錬されて光り輝くしんちゅうのようであり、声は大水のとどろきのようであった。(16)その右手に七つの星を持ち、口からは、鋭いもろ刃のつるぎがつき出ており、顔は、<その**栄光**で/NIV 訳>強く照り輝く太陽のようであった。(17)わたしは彼を見たとき、その足もとに倒れて死人のようになった。すると、彼は右手をわたしの上において言った、「恐れるな。わたしは初めであり、終りであり、(18)また、生きている者である。わたしは死んだことはあるが、見よ、世々限りなく生きている者である。そして、死と黄泉とのかぎを持っている。(黙示録 1 章 12-18 節)

そして、イエスが栄光を受けられたことゆえに、彼に属する私たちもまた、その栄光にあずかることとなります。すなわち、「その日、主が来られて、その聖徒たちの中にあつて栄光を受け、信じるすべての者の間で驚嘆されるとき」(第二テサロニケ 1 章 10 節 NKJV 訳)に、その栄光に入るのです。

わたしたちのいのちなるキリストが現れる時には、あなたがたも、キリストと共に**栄光のうちに**現れるであろう。(コロサイ 3 章 4 節)

## 五節 - 六節

(5)そしてモーセは、自分に属するすべての「家」(すなわち責任を負わされていた領域)において、将来語られることになる[諸々の真理]についての証しとして、しもべとして忠実でした。(6)しかしキリストは、御子として、ご自分の家の上にあって忠実でした。その家とは、もし私たちが[誇りとしている]希望を、確かに、そして終わりまで堅く保ち続けるなら、私たち自身のことなのです。(ヘブル [3 章 5-6 節](#)/NIV 訳)

将来語られることになる[真理]についての証しとして：

これまでに書かれた事からは、すべてわたしたちの教のために書かれたのであって、それは聖書の与える忍耐と慰めとによって、望みをいだかせるためである。(ローマ 15 章 4 節)

私たちは、律法が正しく用いられるなら、それが良いものであることを知っている。(第一テモテ 1 章 8 節/NIV)

モーセの律法や旧約聖書全体の価値を否定する人はいません。私たち現代の信者は、それらを与えられていること自体、大きな祝福を受けています。しかし、これら上記の聖句が示しているように、神の真理のすべてがそこで明確に説明されているわけではありません。とりわけ、メシヤとその教会に関する重要な教理の多くは、初臨が成就するまでは覆いの下に置かれ、ただ予型的に示されていただけでした。ここで言われている「後に語られることになる事柄」(原文ギリシャ語)は、教会時代の初期に預言者と使徒たちを通して明らかにされ、最終的に新約聖書の正典として記された神のご計画のすべての真理と奥義を指しています。確かに旧約聖書は、イエス・キリストと、私たちすべてのために成し遂げられた「こんなに尊い救い」([ヘブル 2 章 3 節](#))を予表していました。しかし、神のご計画に関わるすべての奥義の完全な啓示は、御子の受肉、十字架の御業、そしてその後の復活、昇天、栄化を待たなければならなかったのです。

私は、この[教会]のために、あなたがたに[真理を]分配するという目的のために神から私に与えられた委任(使命)に従って、仕える者(奉仕者)となった。それは、神のご計画(直訳「みことば」;ギリシヤ語 *λογος*)を完成に至らせるためであり、すなわち、長い時代と過去の世代にわたって隠されてきた奥義[神秘]を[知らせるため]である。しかし今や、それは神の聖なる者たち(すなわち信者たち)に啓示されたのである。神は、これらの者たちに対して、異邦人に関わるこの栄光に満ちた奥義の富がどれほど大きいかを知らせることを望まれた。なぜなら、それは「キリスト——あなたがたの栄光の希望——が、あなたがたのうちにおられる」ということだからである。(コロサイ 1 章 25-27 節/NIV 訳)

(10)この救については、あなたがたに対する恵みのことを預言した預言者たちも、たずね求め、かつ、つぶさに調べた。(11)彼らは、自分たちのうちにいますキリストの霊が、キリストの苦難[すなわち、十字架]とそれに続く[救いに関わることを含む]栄光とを、あらかじめあかした時、それは、いつの時、どんな場合をさしたのかを、調べたのである。(12)そして、それらについて調べたのは、自分たちのためではなくて、あなたがたのための奉仕であることを示された。それらの事は、天からつかわされた聖霊に感じて福音をあなたがたに宣べ伝えた人々によって、今や、あなたがたに告げ知らされたのであるが、これは、御使たちも、うかがい見たいと願っている事である。(第一ペテロ 1 章 10-12 節)

上に挙げた聖句が示しているとおり、昔の預言者たちは、自分たちが語っている内容が当時の段階では、神のご計画により大きく奥義に包まれた「部分的な啓示」であることを理解していました。それは、キリストが肉となって世に来られた後に起こる、まばゆいばかりの真理の完全な啓示を、ただ前もって影のように指し示すものにすぎなかったのです。したがって、律法そのものの真の価値や、それを書き定め制度として確立したモーセの忠実さの意義は、後の時代に初めて完全に明らかにされる真理について、彼が証しを立てた点にこそ見いだされます。ところが、パウロの時代のエルサレムの信徒たちは、この秩序を逆転させてしまいました。彼らは、預言や使徒の働き、そして形成されつつあった新約聖書の正典を通して、すでに完全に啓示されていた真理よりも、過去に語られたもの——しかも実際には歪められた解釈——の方を優先するという誤った選択をしてしまったのです。

#### 忠実さ：

モーセは忠実だったのでしょうか。聖書は確かにそう証言しています。しかし、彼はあくまで人間であり、完全ではありませんでした。これに対してイエス・キリストは、世の

罪を負うにふさわしいお方となるため、完全に罪のない生涯を送らなければなりませんでした。

神であられるにもかかわらず人となられたこと(ピリピ 2 章 5-8 節)、私たちに想像も及ばないほどの激しい反対の中で完全な生を生き抜かれたこと、完全な奉仕を成し遂げられたこと、十字架に至るまでの耐え難い苦難を受けられたこと、そして最後には、全世界の罪をその身に負い、血を流してそれを贖うために暗闇の中で死なれたこと——これらすべてにおけるキリストの忠実さの上に、神のご計画全体と私たちの救いは成り立っています。

それにもかかわらず、エルサレムの信徒たちが、かつての誤った律法主義的態度に逆戻りし、結果としてモーセをキリストよりも上に置くかのような考え方に陥ったこと——すなわち、もはや効力を失った律法の儀式に立ち返るという行為——は、到底受け入れがたいものでした。

それは本質的に、キリストと、私たちのためになされたその犠牲を踏みにじる行為にほかなりません。

(28)モーセの律法を無視する者が、あわれみを受けることなしに、二、三の人の証言に基いて死刑に処せられるとすれば、(29)神の子を踏みつけ、自分がきよめられた契約の血を汚れたものとし、さらに恵みの御霊を侮る者は、どんなにか重い刑罰に価することであろう。(ヘブル 10 章 28-29 節)(参照 [ヘブル 6 章 6 節](#))

#### 家(オikos οἶκος oikos):

(42)そこで主が言われた、「主人が、召使たちの上に立てて、時に応じて定め  
の食事をそなえさせる忠実な思慮深い家令(/管理人;直訳「分配者」:オイコノモ  
ス οἶκος νόμος oikonomos)は、いっただれであろう。(43)主人が帰ってき  
たとき、そのようにつとめているのを見られる僕は、さいわいである。(44)よく  
言うておくが、主人はその僕を立てて自分の全財産を管理させるであろう。(ル  
カ 12 章 42-44 節)

「ディスペンセーション(Dispensations)」の項の導入部で説明したとおり、「家」(ギリシ  
ヤ語: οἶκος オイコス oikos)とは、モーセのような神の管理者たちに委ねられた責  
任の範囲を指しています。より具体的には、その管理者が霊的必要を供給すべき対象  
となる「家族」、すなわち神の家の構成員を意味し、管理者は、神がそれぞれの管理期  
間(ディスペンセーション)ごとに定められた基準に従って、彼らに霊的な糧を分配する  
責任を負っていました([エペソ 2 章 19-22 節](#), [4 章 11-16 節](#); [第一ペテロ 2 章 5 節](#))。

人類史における神のご計画の中で、各ディスペンセーションごとに、神の民が成長し繁栄するために必要な霊的「食物」を供給する方法は異なっており、パウロがこの書簡の冒頭で述べているとおり、「多くの時に、また多くの方法によって」与えられてきました。しかし、上に引用したルカ福音書の箇所が明らかにしているように、その供給を任されてきた人々には常に同じ責任が求められてきました。すなわち、自らの務めを忠実に果たすこと、言い換えれば「忠実で賢い管理者」であることです。

このようなわけだから、[すべての]人はわたしたちを、キリストに仕える者、神の奥義を管理している者と見るがよい。この場合、管理者に要求されているのは、[主にに対して]**忠実であること**である。(第一コリント 4 章 1-2 節)

この文脈において、イエスが「ご自分を任命された方に忠実であった」ということ自体は、少しも不思議ではありません<sup>14</sup>。むしろ当然のことです。ところが意外なのは、パウロがあえてこの点を明言する必要があると感じていることです。確かに、モーセが神の民のために与えられた使命を忠実に果たしたその姿勢は並外れたものでした。しかし彼はあくまでも人間であり、完全ではありませんでした(出エジプト記 4 章 10-17 節; 民数記 20 章 8-13 節参照)。しかも、そのモーセの忠実さ自体も、彼と会い、語り、導かれたイエス・キリストに対する忠実さであったのです。<sup>15</sup>

(24) 信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、(25) 罪のはかない歓楽にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、(26) **キリストのゆえに受けるそしり**を、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。(ヘブル 11 章 24-26 節)

### 堅く保ち続けるなら：

序論で説明したとおり、救いは、私たち信者が何かの行いによってそれを「獲得する」ことを条件としているわけではありません。しかし同時に、救いはイエス・キリストに対

---

<sup>14</sup> ここで用いられているギリシヤ語の動詞  $\pi \omicron \iota \epsilon \omega$  ポイエオー (poieō) は、通常は「作る」「行う」を意味しますが、文脈によっては「任命する」「任じる」という専門的な意味で用いられることがあります。本箇所もその用例であり、[使徒行伝 2 章 36 節](#)でも同じ用法が見られます。

<sup>15</sup> すなわち、モーセが神と持ったすべての交わりは、三位一体のうち啓示された位格であるイエス・キリストとのものであり、それは神学で「キリストファニー」と呼ばれるものを通して行われていました。キリストファニー ( $\chi \rho \iota \sigma \tau \omicron \phi \acute{\alpha} \nu \epsilon \iota \alpha$  / Christopháneia) とは、受肉以前の主イエス・キリストが姿を現して現れる出来事、すなわち「受肉前の顕現」を意味します。  
参照：[BB 1「神についての研究」第 II.C 節「旧約における三位一体」](#)。

する継続的で持続的な信仰と忠実さに依存しているという事実があります。もし私たちが信仰を捨て去るなら、その時点でもはや信者ではなくなります。そして、救われるのは信者だけなのです。<sup>16</sup>

彼を信じる者は、さばかれない。信じない者は、すでにさばかれている。神のひとり子の名を信じることをしないからである。(ヨハネ 3 章 18 節)

聖書は、不忠実になることや罪深い生活に身を委ねることの危険性について、情熱的な訴えと警告に満ちています。これらの多くは、「絶対的永遠の保障(いったん救われたら必ず救われ続ける)」という誤った教理を支持する人々にとっては、説明しきれないものです。というのも彼らは、罪が信仰を弱め、むしろ、破壊していくという事実を理解していないからです。そして、主から十分に離れてしまった人にとっては、信仰の喪失、すなわち背教が現実になり得るということは、もしその離反が放置され、自然な結末まで進むならば、避けられない可能性なのです。<sup>17</sup>

罪の支払う報酬は死である。しかし神の賜物は、わたしたちの主キリスト・イエスにおける永遠のいのちである。(ローマ 6 章 23 節)

(18) わたしの子テモテよ。以前あなたに対してなされた数々の預言の言葉に従って、この命令を与える。あなたは、これらの[予告された]言葉に励まされて、信仰と正しい良心とを保ちながら(参照 [第一テモテ 1 章 5-6 節](#))、りっぱに戦いぬきなさい。(19) ある人々は、正しい良心を捨てたため、**信仰の破船に会った**。(第一テモテ 1 章 18-19 節)

(1) こういうわけだから、わたしたちは聞かされていること[教え]を、いっそう強く心に留めねばならない。そうでないと、**おし流されてしまう**。(2) というのは、御使たちをとおして語られた御言(すなわち、律法)が効力を持ち、あらゆる罪過と不従順とに対して正当な報いが加えられたとすれば、(3) わたしたちは、こんなに尊い救[すなわち、いのちのことばご自身からのもの]をなおざりにしては、どうして報いをのがれることができようか。(ヘブル 2 章 1-3 節前半)

(14) 人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。

---

<sup>16</sup> ペテロ・シリーズ#27 の [「信仰を脅かす三つの偽りの教義」](#) を参照ください。

<sup>17</sup> 参照: 聖書の基礎第 3 部 B [「罪論」](#). IV.6. [「背教と死に至る罪」](#)。

(15)欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。(ヤコブ 1 章 14-15 節)

(14) しかし人はそれぞれ、自分自身の欲望によって[引きずられ]、また[誘惑されて]試みに遭うのである。次に、欲望がはらむなら(すなわち、人がそれに屈するなら)、それは罪を生み出す。(15) そして、罪が最後まで成し遂げられるなら(すなわち、人が罪の生活に身を委ねるなら)、それは**死**(すなわち霊的な死、信仰の死)**を生み出す**。(ヤコブ 1 章 14-15 節/NIV 訳)

この問題については、すでに序論の中で同趣旨の多くの聖書箇所を引用してきました(すなわち、[第一コリント 15 章 1-2 節](#); [コロサイ 1 章 22 節後半-23 節](#); [第二テモテ 2 章 11-13 節](#); [ヘブル 3 章 14 節](#))。ここでは、救いの後に信者が行う最も重要なことは、自らの信仰を堅く保ち続けることであり、それこそが私たちの永遠のいのちに直接関わっているという事実を改めて思い起こすため、さらにいくつかの関連する箇所を挙げます。

(5) わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。(6) **人がわたしにつながっていないならば**、枝のように外に投げすてられて枯れる。人々はそれをかき集め、火に投げ入れて、焼いてしまうのである。(ヨハネ 15 章 5-6 節)

(22) 神の慈愛と峻厳とを見よ。神の峻厳は倒れた者たちに向けられ、神の慈愛は、もしあなたがその慈愛にとどまっているなら、あなたに向けられる。**そうでないと、あなたも切り取られるであろう**。(23)しかし彼らも、不信仰を続けなければ、つがれるであろう。神には彼らを再びつぐ力がある。(ローマ 11 章 22-23 節)

(9) それとも、正しくない者が神の国をつぐことはないのを、知らないのか。まちがってはいけない。不品行な者、偶像を礼拝する者、姦淫をする者、男娼となる者、男色をする者、盗む者、(10)貪欲な者、酒に酔う者、そしる者、略奪する者は、いずれも神の国をつぐことはないのである。(第一コリント 6 章 9-10 節)

あなたがたは、**はたして**[クリスチャンとしての]**信仰があるかどうか**、**自分を反省し、自分を吟味するがよい**。それとも、イエス・キリストがあなたがたのうちにおられることを、悟らないのか。もし悟らなければ、あなたがたは、にせものとして見

捨てられる。(第二コリント 13 章 5 節)

(19)肉の働きは明白である。すなわち、不品行、汚れ、好色、(20)偶像礼拝、まじない、敵意、争い、そねみ、怒り、党派心、分裂、分派、(21)ねたみ、泥酔、宴楽、および、そのたぐいである。わたしは以前も言ったように、今も前もって言うておく。このようなことを行う者は、**神の国をつぐことがない**。(ガラテヤ 5 章 19-21 節)

(3)また、不品行とさまざまな汚れや貪欲などを、聖徒にふさわしく、あなたがたの間では、口にすることさえしてはならない。(4)また、[あなたがたの間で]卑しい言葉と愚かな話やみだらな冗談を避けなさい。これらは、よろしくない事である。それよりは、むしろ感謝をささげなさい[それが、あなたがたの口から聞かれるべきものである]。(5)あなたがたは、よく知っておかねばならない。すべて不品行な者、汚れたことをする者、貪欲な者、すなわち、偶像を礼拝する者は、**キリストと神との国をつぐことができない**。(6)あなたがたは、だれにも不誠実な言葉でだまされてはいけない。これらのことから、神の怒りは不従順の子らに下るのである。(7)だから、彼らの仲間になってはいけない。(エペソ 5 章 3-7 節)

富むことを願い求める者は、誘惑と、わななどに陥り、また、人を滅びと破壊とに沈ませる、無分別な恐ろしいさまざまの情欲に陥るのである。(第一テモテ 6 章 9 節)

(8)あなたがたは自分自身に気をつけなさい。あなたがたがこれまでに苦勞して成し遂げてきたものを失ってしまうことがないように、むしろ満ち足りた報いを受けるためである。(9)道を踏み外す者、すなわちイエス・キリストについての教えにとどまらない者は、[神において]分け前を持たない。(第二ヨハネ 1 章 8-9 節/NIV)

イエス・キリストを信じている私たちは、自分たちの救いが確かなものであることを保証されています。私たちは、キリストのからだ、キリストの花嫁、キリストの教会の一部として、イエスの相続、子としての身分、そして統治にあずかっています。そして、復活と報いという栄光ある将来が私たちの前に置かれています……この世において彼に忠実であり続け、どのようなことが起こっても彼への信仰を保ち、忍耐して歩み続けるならば、という条件のもとです。ところがエルサレムの信者たちは、まだ世に来ていないメシヤを宣言する儀式へと立ち戻ることによって、まさにこの点——すなわち自分たちの信仰そのもの——を危険にさらし、その結果として彼への信仰を自ら弱めていたのです。

(3)ほむべきかな、わたしたちの主イエス・キリストの父なる神。神は、その豊かなあわれみにより、イエス・キリストを死人の中からよみがえらせ、それにより、わたしたちを新たに生れさせて生ける望みをいだかせ、(4)あなたがたのために天にたくわえてある、朽ちず汚れず、しばむことのない資産を受け継ぐ者として下さったのである。(5)あなたがたは、終りの時に啓示さるべき救にあずかるために、**信仰により神の御力に守られているのである。**(6)そのことを思って、今しばらくのあいだは、さまざまな試練で悩まねばならないかも知れないが、あなたがたは大いに喜んでいる。(7)こうして、あなたがたの信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊いことが明らかにされ、イエス・キリストの現れるとき、さんびと栄光とほまれとに変わるであろう。(8)あなたがたは、イエス・キリストを見たことはないが、彼を愛している。現在、見てはいないけれども、信じて、言葉につくせない、輝きにみちた喜びにあふれている。(9)**それは、信仰の結果なるたましいの救を得ているからである。**(第一ペテロ 1 章 3-9 節)

#### 七節～十節前半

(7)それゆえ、聖霊が言われるとおりです。「きょう、もし御声を聞くなら、(8)荒野での試みの時に、反逆においてしたように、あなたがたの心をかたくなにすることはならない。(9)そこでは、あなたがたの先祖が、わたしを試み、わたしを試し、[自分たちのための]わたしのわざを見ていながら、(10)四十年の間そうしたのである。(ヘブル 3 章 7-10 節前半)

#### 聖霊が言われているとおり：

ここでパウロが聖霊に言及しているのは、いくつかの目的があります。第一に、彼が語っているすべての内容が聖書に基づくものであり、神から出たものであり、聖霊によって靈感されたものであることを、読者に思い起こさせるためです。それは、彼が引用している聖句だけでなく、それらが含まれているこの書簡そのものについても同様です。

そして私たちも、あなたがたが私たちから聞いた神のことばを受け取ったとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れたことについて、絶えず神に感謝している。このことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのである。(第一テサロニケ 2 章 13 節/NIV 訳)

第二に、ここで引用されている聖霊の戒めは、出エジプト世代の行動を一つの模範(例)として示すものであり、それが詩編の作者によって同時代の人々に適用され、またここではパウロによって当時のエルサレムの信者たちに適用されているという点に注意が向けられています。このように聖霊への言及がなされているのは、彼らもまた耳を傾けるべき相手は聖霊であって、すでに役割を終えた律法の文字を、意図的に歪めて解釈したものではないということを、読者に改めて思い起こさせるためでもあるのです。

あなたがたは、そんなに物わかりがわるいのか。御霊で始めたのに、今になって肉で仕上げるといふのか。(ガラテヤ 3 章 3 節)

「肉によって仕上げようとする」こそ、まさにこれらの妥協していた読者たちが当時「その破滅へ向かう進路にすでに入っていた」ことでした。彼らは、御霊を無視し、御霊を消し、御霊を悲しませながら、真理から背を向けていたのです(ローマ 8 章 6 節; [第一コリント 3 章 1 節](#); [ガラテヤ 5 章 16 節](#); [エペソ 4 章 30 節](#); [第一テサロニケ 5 章 19 節](#))。それは、出エジプト世代が行い、ついには完全な破滅に至ったのと同じ道でした。

ところが彼ら(すなわち、出エジプトの世代)はそむいてその聖なる霊を憂えさせた…(イザヤ 63 章 10 節前半)(参照 [詩篇 78 篇 17 節](#); [78 篇 40 節](#))

#### 主を試みること:

あなたがたがマッサでしたように、あなたがたの神、主を試みてはならない。(申命記 6 章 16 節)

前にも述べたとおり、パウロは、主に対する不忠実さで悪名高かった出エジプト世代を、エルサレムの読者たちにとって不快な比較対象として用いています。出エジプト世代は、繰り返し主の忍耐を試し、その反抗的態度によってよく知られる存在となりました。また同時に、主に対して繰り返し背を向ける信者がどのような結果を招くかを示す、究極の警告の物語を形作る存在でもあったのです。

わたしの栄光と、わたしがエジプトと荒野で行ったしるしを見ながら、このように十度もわたしを試みて、わたしの声に聞きしたがわなかった

人々はひとりも、わたしがかつて彼らの先祖たちに与えると誓った地を見ないであろう。またわたしを侮った人々も、それを見ないであろう。(民数記 14 章 22-23 節)

これは、主イエス・キリストご自身が語られた言葉であり、あの反逆的な世代を叱責し、彼らに対して裁きの宣告を下されたものです。このような悪しき模範の典型と読者たちを比較することは、確かに彼らの感情を逆なでするものであったに違いありません。しかし、主の忠実なしもべであったパウロは、自分に対する彼らの感情よりも、自分に託された人々の霊的な益をはるかに重んじていたのです([第二コリント 7 章 8-12 節](#); [第二テモテ 1 章 4 節](#))。

イエスは[サタンに]答えて言われた、「『主なるあなたの神を試みてはならない』と言われている」。(ルカ 4 章 12 節)

主イエス・キリストは神です。ここで悪魔に対して語られた主の、決して控えめとは言えないこの応答は、サタンが物事の順序を完全に取り違えていることを突きつけるものでした。すなわち、神が私たちが試されるのであって、私たちが神を試すのではありません。それにもかかわらず、もし私たちが自らの判断で神を試そうとするなら、それは悪魔と同じ態度を取ることに他なりません。実際、悪魔は最初から神を試し続けてきました。神に反逆したその時から、今日に至るまで、神の御計画を妨げようとし続けているのです。では、その結末はどうなるのでしょうか。その行き着く先は、言うまでもなく「火の池」です。

そして、彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄との池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ預言者もいて、彼らは世々限りなく日夜、苦しめられるのである。(黙示録 20 章 10 節)

別の形ですが、出エジプトの世代—すなわち、エジプトに対する神の大いなるさばきの奇跡を自ら目撃し、敵から「ものを奪い取って」([出エジプト記 12 章 36 節](#))安全にその地を脱出し、さらに追撃してきた者たちが溺れ死ぬ一方で、紅海を奇跡的に渡らされた、まさにその同じ人々—は、ほどなくして主に忠実に従う道から離れ、その結果、神の御怒りを招くことになりました。その結果、主はこう宣告されたのです。「彼らのうち一人として、わたしが先祖たちに誓って約束した地を見る者はいない」(民数記 14 章 23 節/NIV 訳)。

しかし、ここで引用されているメリバ([詩篇 95 篇 8 節](#))において主を試した者たち

は、あの出エジプトの世代ではありませんでした(出エジプト記 17 章 7 節)。その子どもたちもまた、何年も後になって同じことを行ったのです(民数記 20 章 8-13 節, 20 章 23-24 節)。このことは、後の出来事においてモーセが抑えきれない怒りを爆発させてしまった理由の一端を説明しています——その怒りのゆえに、彼自身もまた、その時点では約束の地に入ることを許されなかったのです。そもそも、彼らの父祖の世代は、最初から「強情な世代」であり(申命記 31 章 27 節)、主を繰り返して試し続けてきました(民数記 14 章 22 節)。それだけでも十分に深刻なことでした。ところが今度は、律法の下で育ち、幼い頃から両親の契約違反とその結果を目の当たりにしてきたその子どもたちまでもが、同じ悪しき足跡をたどり、主の救いを忍耐して待つのではなく、再び主の忍耐を試す道を選んだのです。

そして今や同じことが、エルサレムの信徒たちにも起こっていました。本来であれば、すでに無効となった律法ではなく、キリストに従うがゆえに生じた圧迫や迫害の中にあっても、主の救いを忍耐強く待ち望むべきであったにもかかわらず、彼らはそれとは逆に、律法へと後戻りし、キリストから離れることによって、ほとんど同一の仕方で神を試していたのです。彼らもまた、かつての出エジプトの世代やその子どもたちと同じように、主の忍耐を試していました。しかし彼らは、**自分たちこそが**実際には試され、吟味されている側であるという事実には気づいていませんでした。また、その自己中心的な選択の行き着く先が、キリストとの歩みを完全に立て直さない限り、想像を絶するほど悲惨な結末になるということも理解していなかったのです。

#### 心をかたくなにすること(Harden the Heart) :

私たちが新生するとき、神は私たちの心に「新しい出発」を与えてくださいます。いわば、不信仰の時代に心や思いの中に蓄積されてきた「瘢痕組織(傷あと)」のようなもの——すなわち、偽りへの頑なな執着や、真理を拒み続けてきた思考の癖や態度——は、救いにおいて御霊の証しに応答する中でほぐされ、取り除かれていきます。その結果、私たちの心はねじれや歪みのない、清められた状態へと新しくされ、もはや過去の束縛に縛られることなく、神の御言葉に含まれる豊かな真理のすべてを喜びをもって受け入れるようになるのです。

少なくとも、本来はそのように働くはずなのです。しかし残念ながら、救いの時点では真理と御霊の導きに対して前向きであった信者であっても、古い習慣や思考パターンへと後退してしまうことは十分に起こり得ます。実際のところ、心を継続的に真理で満たさない限り、そのような後退はほとんど避けられないものです。人間の心は「空白のままではいられない」性質を持っています。もし神の真

理によって日々養われなければ、その空白はやがて悪魔の偽りによって満たされるようになります。そしてその結果、心の中にすでにある真理は次第に弱められ、やがては偽りによって侵食され、置き換えられてしまうのです（[ローマ 1 章 21 節](#)；[エペソ 4 章 18 節](#)）<sup>18</sup>。これが、「心がかたくなになる」過程の大まかな構図なのです。<sup>19</sup>

(19)[偽教師たちは]この人々に[弱い信者たちに]自由を与えると約束しながら、彼ら自身は滅亡の奴隷になっている。おおよそ、人は征服者の奴隷となるものである。(20)彼らが、主また救主なるイエス・キリストを知ることにより、この世の汚れからのがれた後、[これらの弱い信者たちが]またそれに巻き込まれて征服されるならば、彼らの後の状態は初めよりも、もっと悪くなる。(21)義の道を心得ていながら、自分に授けられた聖なる戒めにそむくよりは、むしろ義の道を知らなかった方がよい。(22)ことわざに、「犬は自分の吐いた物に帰り、豚は洗われても、また、どろの中へころがって行く」とあるが、彼らの身に起ったことは、そのとおりである。(第二ペテロ 2 章 19-22 節)

不信者たちもまた心を頑なにし、それを習慣化しています。なぜなら、義なる神の前にあって、死と裁きという現実と直面しながらこの世を生きることは容易ではなく——しかもそれらの避けられない事実は、神の創造の秩序そのものによってすべての人に明らかにされているからです（[ローマ 1 章 18-32 節](#)）——そうした非常に不都合な真理を無視せずに生き続けることは困難だからです（[ローマ 11 章 7 節](#)；[第二コリント 3 章 14 節](#)）。

(17) 聖書はパロにこう言っている、「わたしがあなたを立てたのは、この事のためである。すなわち、あなたによってわたしの力をあらわし、また、わたしの名が全世界に言いひろめられるためである」。(18)だから、神はそのあわれもうと  
思う者をあわれみ、かたくなにしようと思う者を、かたくなになさるのである。  
(ローマ 9 章 17-18 節)

出エジプトの時代のパロには、きわめて特別な形で、真理と現実を異常なほどまで  
に遮断する能力が与えられていました。その結果、彼は自国民や軍隊、さらには自分

---

<sup>18</sup> サタン「偽りの体系」についての詳細な考察は、[SR 4『サタンの世界システム』第 IV 章「サタンの戦術的方法論」](#)、および[ペテロ・シリーズ#39.2「偽りの教え」](#)を参照してください。

<sup>19</sup> [BB 4B「救済論」II.2.d「心の第一段階の硬化\(真理の暗化\)」](#)参照。

自身の滅びに至ることが明らかであったにもかかわらず、主に逆らうという、常識では考えられない道を最後まで突き進むことができたのです。<sup>20</sup> しかし実のところ、すべての人間にもまた、真理から目を背け、別の現実、別の「真理」を受け入れる能力があります。つまり、真理の代わりに「偽り」を選び取る力を持っているのです。この危うい能力は、私たちが「神のかたち」を持つ存在であることに由来します。神のかたちを持つ者として、人間は神のように「これは真理だ」「これは真理ではない」と宣言することができてしまうのです。しかし決定的な違いがあります。それは、真理を本当に所有しているのは神おひとりだけだということです。したがって、私たちが真の真理を知ることができるのは、神を通して、また御霊を通してのみです。被造物が、実際には真理でないものを「真理だ」と宣言するなら、それはすべて偽りであり、その道を選ぶことは、まさに悪魔の足跡をたどることに他なりません。

あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。(ヨハネ 8 章 44 節)

真理から背を向けること——それがどれほど小さく取るに足らない原則に見えたとしても——は、心がかたくなになる過程の始まりとなり得ます。なぜなら、真理を拒むということは、私たちに真理を教えるお方である聖霊に逆らい、聖霊を消し、また悲しませる行為だからです。そして聖霊なしには、いかなる人間も真理を知り、理解することはできません([イザヤ 63 章 10 節](#); [エペソ 4 章 30 節](#); [第一テサロニケ 5 章 19 節](#))。<sup>21</sup>

---

<sup>20</sup> Ichthys のシリーズ「[出エジプト記 14 章:ファラオの心のかたくなさ\(Hardening Pharaoh's Heart\)](#)」を参照ください。

<sup>21</sup> BB 4B:「[救済論\(Soteriology\)](#)」II.6.e.「[信仰の認識論\(Faith Epistemology\)](#)」を参照ください。

(9)しかし、聖書に書いてあるとおり、「目がまだ見ず、耳がまだ聞かず、人の心に思い浮びもしなかつたことを、＜それらこそ＞神は、ご自分を愛する者たちのために備えられた」のである。(10)そして、それを神は、御霊によってわたしたちに啓示して下さったのである。御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである。(11)いったい、人間の思いは、その内にある人間の霊以外に、だれが知っていようか。それと同じように神の思いも、神の御霊以外には、知るものはない。(12)ところが、わたしたちが受けたのは、この世の霊ではなく、神からの霊である。それによって、神から賜わった恵みを悟るためである。(13)(御霊に内住されている信者に)この賜物について語るにも、わたしたちは人間の知恵が教える言葉を用いないで、御霊の教える言葉を用い、霊によって霊のことを解釈するのである。(14)生れながらの人は、神の御霊の[より深い]賜物を受けられない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない。(15)しかし、霊の人(御霊に内住されている信者)は、すべてのものを判断するが、自分自身はだれからも判断されることはない。(16)「だれが主の思いを知って、彼を教えることができようか」。しかし、わたしたちはキリストの思い(直訳「心・思考」)を持っている。(第一コリント 2 章 9-16 節)

不信者の慣習に立ち返り、死んだ伝統に従うことによって、行動の上でキリストの十字架を退けることは、決して些細な真理への違反ではありませんでした。そしてエルサレムの信者たちの心も、必然的にその行動に引きずられていったのです。霊的後退、背教、そして「死に至る罪」は、真理に対して心を頑なにしていく道の行き着く先に必ず待ち受けています。その結果、偽りに屈した信者の霊的状态は、最初から真理を受け入れなかった不信者のそれと、本質的に何ら変わらないものになってしまうのです。<sup>22</sup>

#### 十節後半 - 十一節

(10b)それで、わたしはこの世代に憤り、[自分自身に]こう言った、『彼らはいつも心の中でさ迷い、わたしの道を知らなかつた』。(11)それゆえ、わたしは怒って誓った、『彼らは決して、わたしの安息に入ることはない』。(ヘブル 3 章 10 節後半～11 節)

---

<sup>22</sup> BB 3B「[罪論 \(Hamartiology\)](#)」第 IV.6「[背教と死に至る罪 \(Apostasy and the Sin unto Death\)](#)」を参照。

### わたしは怒って誓った：

本ミニストリーの読者にとっては驚くことではありませんが、神は人間のように感情的に「怒る」お方ではありません。神は起こるすべての出来事をあらかじめ定めておられ、完全な予知のもとでそれを成就させておられます。したがって、神が何かによって不意を突かれたり、感情的に動揺されたりすることは決してありません。

怒りとは、人間の感情の一つであり、私たちに起こる出来事に対してしばしば非理性的な形で反応するものです。確かに「義なる憤り」と呼ばれるものもあります(たとえば、モーセが金の子牛の事件に激怒し、その結果として律法の板を砕いたことのように)。しかし実際には、多くの場合、怒りは非常に主観的であり、罪に陥りやすいものです(たとえば、モーセが新しい世代の民が彼らの親たちと同じように不平を言ったことに激怒し、その結果、岩に語りかける代わりにそれを打ってしまい、約束の地に入る機会を失ったことのように)。

英語でもギリシヤ語でも、「怒る(mad / angry)」という語が、一時的な激怒だけでなく、病的な狂気(精神錯乱)を表す場合にも用いられるのは、決して偶然ではありません。なぜなら、人がこの感情に支配されるとき、自制心と理性を保っているなら決してしないような「常軌を逸した行動」を取ってしまうことが多いからです(たとえば、いわゆる「運転中の逆上行為」がその典型です)。しかし、完全である神が、このような罪深い怒りに陥ることはあり得ません。神が示される「怒り」は、あくまで「義なる憤り」でなければなりません。とはいえ、ここで語られている「憤り」や「怒り」も、私たち人間が日常的に経験する感情とは本質的に異なります。これは、神がこの種の行為をいかに深く忌み嫌っておられるかを表現するための、人間的な言葉遣いにすぎません。というのも、神は神であられる以上、イスラエルの民が何をするかを前もって知らなかったはずが**ありません**。神はすべてをご存じであり、また、神の永遠の定め、すなわち完全で不変の御計画の中で定められていないことが起こることもあり得ないからです。

(9)いにしえよりこのかたの事をおぼえよ。わたしは神である、わたしのほかに神はない。わたしは神である、わたしと等しい者はない。(10)わたしは終りの事を初めから告げ、まだなされない事を昔から告げて言う、『わたしの計りごとは必ず成り、わが目的をことごとくなし遂げる』と。(イザヤ 46 章 9-10 節)

神がご自分についてこうした言い方をなさるのは、私たちのためです。一方で、神は私たちにとって最善のことしか望んでおられません。しかし感情に左右されやすい人

間である私たちは、どんな権威に対しても(たとえば子どもの頃の親に対してそうだったように)、その正しいルールを破ったときにどういう結果が生じるのかを意識しなければ、なかなか正しく振る舞うことができません。もう一方で、こうした人間的な例えがなければ、神の子としてどう生きるべきかを理解することも難しいでしょう。神は永遠の霊でありますが、私たちは肉と血をもった存在です。実際、神が人間の親や家族という仕組みを与えられたのも、大きな意味で、このようなたとえを通してご自身の愛や思いやり、配慮を私たちに理解させるためなのです。私たちは皆、良い父であれ悪い父であれ、あるいはそばにいた父であれ不在だった父であれ、地上の父親との比較を通して、「完全な父」とはどのような方なのかをある程度つかむことができます。神学では、このように、私たちの理解のために神に人間の感情を当てはめて表現することを「アントロポパシズム(anthropopathism: 擬人的感情表現)」と呼びます。

(8) 主はあわれみに富み、めぐみふかく、怒ること遅く、いつくしみ豊かでいらせられる。(9) 主は常に責めることをせず、また、とこしえに怒りをいだかれない。(10) 主はわれらの罪にしたがってわれらをあしらわず、われらの不義にしたがって報いられない。(11) 天が地よりも高いように、主がおのれを恐れる者に賜わるいつくしみは大きい、(12) 東が西から遠いように、主はわれらのとがをわれらから遠ざけられる。(13) 父がその子供をあわれむように、主はおのれを恐れる者をあわれまれる。(詩篇 103 篇 8-13 節)

しかし大切なのは、神がこの上なく憐れみ深く、親切で、赦しに満ちておられるからといって、また、私たちのような人間と同じ意味で怒られる方ではないからといって、神を軽く見たり、敬う気持ちを弱めてよい理由にはまったくならない、ということです。神の憐れみは、私たちが悔い改めへと導くためのものであって、罪や反逆を大胆に行う口実を与えるためのものではありません(ローマ 2 章 4 節; [第二ペテロ 3 章 15 節](#))。むしろ、それは逆に、**いっそう**深い敬虔な恐れをもって神を畏れ敬うべき理由なのです。ところが当時のエルサレムの信者たちは、まさにこの点で失敗していました。

そして人に言われた、『見よ、主を恐れることは知恵である、悪を離れることは悟りである』と。(ヨブ記 28 章 28 節)

主を恐れる道は清らかで、とこしえに絶えることがなく、主のさばきは真実であって、ことごとく正しい。(詩篇 19 篇 9 節)

主を恐れることは命の泉である、人を死のわなからのがれさせる。(箴言 14 章 27 節)

(13) 事の帰する所は、すべて言われた。すなわち、神を恐れ、その命令を守れ。これはすべての人の本分である。(14) 神はすべてのわざ、ならびにすべての隠れた事を善悪ともにさばかれるからである。(伝道者の書 12 章 13-14 節)

神はすべてをご存じであり、裁きや懲らしめを与えるときにも、完全に正しく、公正に行われます。要するに、私たちの天の父は完全な父として、私たちをどのように懲らしめればよいかを正確に知っておられるのです。どれほど遠くまで迷い出てしまい、どれほどひどい状態に陥っていても、私たちの注意をしっかりと引き戻すだけの痛みを与えつつ、同時に私たちを打ち砕いてしまったり、立ち直れないほど落胆させてしまったりすることのない、その「ちょうどよい方法」で懲らしめてくださいます ([エペソ 6 章 4 節](#); [コロサイ 3 章 21 節](#) 参照)。しかし、この愛ある懲らしめにもかかわらず、それに応じようとせず、信仰を捨て去るところまで進んでしまう人、あるいは誤った道を選び続けて証しそのものを完全に台無しにしてしまう人には、もはや背教か、死に至る罪しか残されていません。これらはいずれも、究極の意味で恐れるべきものなのです。

(25) 出エジプトの世代が、地上で警告を与えていた者(すなわちモーセ)を無視して逃れることができなかつたのだとすれば、天から警告を与えておられるお方から背を向ける私たちが、どうして逃れられようか。(26) その時(シナイ山)には、主の声が地を揺り動かした。しかし今や主はこう約束しておられる。「もう一度、わたしは地だけでなく、天をも揺り動かす」([ハガイ 2 章 6 節](#), [21 節](#) 参照)。(27) この「もう一度」という言葉は、造られたもの、すなわち揺り動かされうるものが取り除かれ、揺るがされることのないものが永遠に残るための、来たる変革を指し示しているのである。(28) そういうわけで、私たちは揺るがされることのない御国を受けているのである。だから、感謝をもって、敬虔と畏れをもって神に喜ばれる仕え方をしようではないか。(29) 私たちの神は「**焼き尽くす火**」だからである。(ヘブル 12 章 25-29 節)

#### この世代:

前にも触れたように、「メリバ(争いの場所)」とは、出エジプトの第一世代と、その約 40 年後の子どもたちが、主を試した場所につけられた名前です。「この世代」という表現は、年長世代に見られた根深い心の頑なさを指すと同時に、同じ傾向がその子どもたちにも受け継がれていたことを示しています ([民数記 21 章 4-8 節](#), [25 章 1-9 節](#); [申命記 9 章 4-29 節](#) 参照)。つまり、「この世代」とは、ある限られた時代の一つの年齢層だけを指しているわけではありません。むしろ、複数の実際の世代にまたがって繰り返

し現れる、人々の霊的な性質や傾向、いわば「型(タイプ)」を指しているのです。私たちの主も、この並行関係を示す際に同じ表現を用い、ご自分の同時代の人々を指して語られました。そしてその適用範囲も同じく広く、「初臨の時代以降、主を拒み続けるイスラエルの人々に見られる心の頑なさ」を表すものとして「この世代<ゲニア γ ε ν ε α: 世代/(転じて)時代>」という言葉が使われたのです([マタイ 11 章 16 節](#), [12 章 41-42 節](#), [23 章 36 節](#); [マルコ 8 章 12 節](#); [ルカ 7 章 31 節](#), [11 章 30-31 節](#), [11 章 50-51 節](#))。

よく言っておく。**この世代**は、これらすべてのことが起こるまで、決して過ぎ去ることはない。(マタイ 24 章 34 節/NIV 訳) (参照.[マルコ 13 章 30 節](#); [ルカ 21 章 32 節](#))

(24)人の子は、ご自分の日に、稲妻が空の端から端までひらめいて空を照らすように現れる。(25)しかしその前に、彼は多くの苦しみを受け、**この世代**から拒まれなければならない。(ルカ 17 章 24-25 節/NIV 訳)

そしてこの預言は、今日に至るまで成就し続けています。というのも、肉によるイスラエルの大多数は、今この時に至るまで、自分たちのメシヤを受け入れることを拒み続けているからです。

兄弟たちよ、あなたがたがこの奥義について知らずにいて、自分を過大に評価することがないようにしてほしい。イスラエルの一部にはかたくなさが生じているが、それは異邦人の満ちる時が到来するまで〔すなわち、神の家族の中へと加えられるべき異邦人の数が満ち、教会が完成する再臨の時まで〕である。(ローマ 11 章 25 節/NIV 訳)

モーセの時代における「この世代」とは、自分勝手な道を歩み、強情な態度を取り続けた者たち(親も子も含めて)を指していました。同じように、主イエスの時代においても、それは主を救い主として受け入れることを拒んだ人々、そしてその歩みを引き継いだ子孫たちを指していました。それはパウロの時代においても同じ意味を持っていました。パウロはこの並行関係を用いて、読者たちに警告しています。彼らが、かつて受け入れた真理から離れ、再び「この世代」の流れに戻ろうとしていることの危険性です。つまり、一方ではグノーシス的神話(モーセの時代の偶像礼拝と似た異教的要素:[民数記 25 章 1-9 節](#)参照)に従う者たちに引き寄せられ、他方では、真理そのものである方が自ら証しされたにもかかわらず、それを見えなくしてしまったパリサイ人の伝統に再び縛られようとしていたのです([第二コリント 3 章 14 節](#)参照)。

(39)そこでイエスは言われた、「わたしがこの世にきたのは、さばくためである。すなわち、見えない人たちが見えるようになり、見える人たちが見えないようになるためである」。(40)そこにイエスと一緒にいたあるパリサイ人たちが、それを聞いてイエスに言った、「それでは、わたしたちも盲人なのではないですか」。(41)イエスは彼らに言われた、「もしあなたがたが(肉体的に)盲人であったなら、罪はなかったであろう。しかし、今あなたがたが『見える』と言い張るところに、あなたがたの罪がある。(ヨハネ 9 章 39-41 節)

### 彼らは心の中でさ迷い：

「さ迷う」という表現は、文字どおりの意味にも、比喩的な意味にも用いられます。ここで使われているギリシヤ語の動詞  $\pi \lambda \alpha \nu \acute{\alpha} \omega$  (planáō/プラナオー) は、英語のプラネット planet (惑星) の語源にもなっています。惑星が「さ迷う者 (wanderers)」と呼ばれたのは、恒星が単純で比較的予測しやすい動きを示すのに対し、惑星の動きは一見すると不規則に見え、天体力学の高度な知識がなければその運行を正確に予測できないからです。

自分の恥をあわにして出す海の荒波、さまよう星(プラナオー)である。彼らには、まっくらなやみが永久に用意されている。(ユダ 1 章 13 節)

「さまよう」とは、明確な方向性や目的もなく、一定の秩序や規則性を欠いたまま動き回ることを意味します。それは、確かな目的を持って行動する人の姿とは正反対のあり方です。神は私たちの人生に対してご計画を持っておられます。信者はそのご計画を受け入れ、この世の歩みにおいても、明確な目的意識をもって前進すべきなのです。すなわち、私たち共通の目標である「祝福に満ちた望み」([テトス 2 章 13 節](#))、すなわち救い主の再臨と復活によって永遠に主と共にあることを目指しつつ、この地上の生涯において主が望まれたことを成し遂げた者として、良い評価を受けることを期待しながら歩むべきなのです ([マタイ 25 章 21-23 節](#); [ルカ 19 章 17 節](#))。

(45)主人がその家の僕たちの上に立てて、時に応じて食物をそなえさせる忠実な思慮深い僕は、いったい、だれであろう。(46)主人が帰ってきたとき、そのようにつとめているのを見られる僕は、さいわいである。(47)よく言うておくが、主人は彼を立てて自分の全財産を管理させるであろう。(マタイ 24 章 45-47 節)

私たちが教会において主から与えられた使命を果たすためには、霊的成長・前進・

実を結ぶ歩みに身をささげることが不可欠です。献身が少なければ努力も少なくなり、その結果、永遠へと向かう道はまっすぐではなくなってしまう。しかし神が「この世代」に対して告発しておられる問題は、単に靈的に前進していないということにとどまりません。むしろ彼らの問題は、いわば方向感覚を完全に失った状態で、神が与えられた目的をまったく受け入れようとせず、神の道(ヨハネ 14 章 6 節)に従う代わりに自分自身の道を選び、前進するどころか後退している、という点にこそあります。

これはおのが道を選び、その心は憎むべきものを楽しむ。(イザヤ 66 章 3 節後半c)

イエスは彼に言われた、「わたしが道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。(ヨハネ 14 章 6 節/)

ここで問題とされている「さまよい」の性質も、本文の中で明確に示されています。彼らは——そしてエルサレムにおける責任ある当事者たちも同様に——「心の中で」さまよっていたのです。すなわち、思考において、内面において、彼らは主を敬い、主に従うことから完全に逸れてしまっていました。そしてそれを一時的ではなく、「いつも」継続的に行っていたために、ついには主を憤らせ、嘆かせる結果に至ったのです。もちろん、これは人間的な感情表現ですが、ここでは、こうした危険な道を歩み続けることがもたらす結果の深刻さを、私たちに強く印象づけるために用いられているのです。

悪人と詐欺師とは人を惑わし(プラナオー π λ α ν á ω / planáō) 人に惑わされて(プラナオー π λ α ν á ω / planáō)、悪から悪へと落ちていく。(第二テモテ 3 章 13 節)

出エジプト世代、そしてそれに続くあらゆる「この世代」が真理から離れ、主を捨て、この世の作り物の幸福を追い求めるというその傲慢な振る舞いは、きわめて深刻なものです。しかし、上の箇所が示しているとおり、偽りを受け入れることは、単に人を欺く行為であるだけでなく、自分自身をも欺く行為なのです(「他人を真理から迷わせながら、自分自身も同じ迷いに陥っていく」)。欺く者たちは、まず自分自身を欺いているのです。このような心の頑なさ(硬化)は、やがて背教や「死に至る罪」という最も恐ろしい結末に至る行動へと進むための前段階であり、最初の欺き手であるサタンの歩んだ道筋と同じ型に従っています。<sup>23</sup>

<sup>23</sup> [BB 4B「救済論\(Soteriology\)」.II.2.d.「心の硬化・第一段階——真理の暗化\(Phase One Hardening of the Heart: Darkening of the Truth\)」](#)を参照。

(13)あなたはさきに心のうちに言った、『わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、北の果なる集会の山に座し、(14)雲のいただきにのぼり、いと高き者のようになろう』。(15)しかしあなたは陰府に落され、穴の奥底に入れられる。(イザヤ 14 章 13-15 節)

(17)あなたは自分の美しさのために心高ぶり、その輝きのために自分の知恵を汚したゆえに、わたしはあなたを地に投げうち、王たちの前に置いて見せ物とした。(18)あなたは不正な交易をして犯した多くの罪によってあなたの聖所を汚したゆえ、わたしはあなたの中から火を出してあなたを焼き、あなたを見るすべての者の前であなたを地の上の灰とした。(19)もろもろの民のうちであなたを知る者は皆あなたについて驚く。あなたは恐るべき終りを遂げ、永遠にうせはてる」。 (エゼキエル 28 章 17-19 節)

あなたがたは自分の父、すなわち、悪魔から出てきた者であって、その父の欲望どおりを行おうと思っている。彼は初めから、人殺しであって、真理に立つ者ではない。彼のうちには真理がないからである。彼が偽りを言うとき、いつも自分の本音をはいているのである。彼は偽り者であり、偽りの父であるからだ。(ヨハネ 8 章 44 節)

#### わたしの道を知らなかった：

モーセに導かれた出エジプト世代であれ、パウロの時代のエルサレムの人々、さらにはその先祖たちであれ、主の道が「知らされていなかった」かのように振る舞うことは事実には反します。実際には、彼らは繰り返し、十分すぎるほど主の御心と真理を告げ知らされていたのです。問題は「聞かなかった」ことではなく、「聞いていながら受け入れなかった」ことにありました。

(18)しかしわたしは言う、彼らには聞えなかったのであろうか。否、むしろ「その声は全地にひびきわたり、その言葉は世界のはてにまで及んだ」。(19)なお、わたしは言う、イスラエルは知らなかったのであろうか。まずモーセは言っている、「わたしはあなたがたに、国民でない者に対してねたみを起させ、無知な国民に対して、怒りをいだかせるであろう」。(20)イザヤも大胆に言っている、「わたしは、わたしを求めない者たちに見いだされ、わたしを尋ねない者に、自分を現した」。(21)そして、イスラエルについては、「わたしは服従せず反抗する民に、終日わたしの手をさし伸べていた」と言っている。(ローマ 10 章 18-21 節)

[ヘブル 3 章 10 節](#)にある「知らない」<-新改訳IV/悟らなかった-フランシスコ訳/認めなかった-口語訳>に対応するギリシヤ語は、動詞 ギグノースコー γ ἴ γ ν ὄ σ κ ω (gignōskō) のアオリスト形です。この動詞は通常「知る」という意味を持ちますが、アオリストではしばしば「決断する」「判断する」「意図的に選び取る」というニュアンスを帯びることがあります([使徒行伝 1 章 7 節](#)<ギグノースコー:あなたがたの決めることではない>; [ルカ 16 章 4 節](#)<ギグノースコー:こうしよう>参照)。本箇所でも、その意味合いで用いられています。したがって、「この世代」が主の道を「知らなかった」とは、出エジプトの並行事例においてモーセや主に忠実な者たちが律法とその意味を熱心に教えなかったから**ではありません**。また、その適用としてのエルサレムの信徒たちの場合でも、使徒たちが初臨後、十字架、復活以後に明らかにされた奥義の教理全体を十分に示さなかったから**ではありません**。そうではありません。彼らが「知らなかった」のは、意図的に無知であろうと決断したからです。すなわち、彼らは明らかに示されていた真理を意識的に拒絶し、軽んじ、代わりに悪魔の偽りを**選び取った**のです。人の心から真理が拒み捨てられると、そこに生じる空白は必ず何らかの偽りによって埋められます。真理を退けることは、単なる消極的な無関心ではなく、必然的に偽りを受け入れる積極的な選択へとつながっていくのです。

彼らは神について知ってはいましたが、神として神をあがめることもせず、感謝することもしませんでした。その代わりに、[この世の]むなしい思いに身を委ね、その無分別な心は暗くなってしまったのです。(ローマ 1 章 21 節/NIV 訳)

(17)そこで私は主にあって、あなたがたにこう告げ、強く勧めます。もはや異邦人が歩んでいるように、むなしい思いで歩んではいけない。(18)彼らは思考が暗くされ、彼らの内にある無知と心のかたくなさのゆえに、神のいのちから切り離されている。(19)[神の真理に対する]あらゆる感覚を失ってしまい、好色に自分自身を引き渡し、あらゆる種類の汚れを、さらに欲し続けながら行うようになっていく。(エペソ 4 章 17-19 節/NIV 訳)

#### 彼らは決して、わたしの安息に入ることはない:

ここで言われている「安息」とは、モーセの律法によって定められた安息日そのものを指しているのではなく、特定の「安息の場所」を意味しています。私たちの文脈でパウロが引用している詩篇 95 篇 11 節において、この「安息の場所」とはカナンの地、すなわち約束の地を指しています。それは、年長の出エジプト世代が、徹底した不信仰のゆえに入ることを拒んだ地でした。彼らは、カレブとヨシュアが持ち帰った肯定的な

報告を退け、他の十人の斥候がもたらした否定的な報告を選び取った結果、その後二度とその地に入ることを許されなかったのです。

(34)主は、あなたがたの言葉を聞いて怒り、誓って言われた、(35)『この悪い世代の人々のうちには、わたしが、あなたがたの先祖たちに与えると誓った**あの良い地**を見る者は、ひとりもないであろう。(36)ただエフネの子カレブだけはそれを見ることができよう。彼が踏んだ地を、わたしは彼とその子孫に与えるであろう。彼が全く主に従ったからである』。(申命記 1 章 34-36 節)

しかし、それ以後のすべての世代にとって、この「安息の場所」はもはや物理的な土地ではなく、霊的な安息の領域を指します。出エジプトの世代が、主を信頼し、主が備えられた地理的な安息の地へと確信をもって入るべきであったのと同様に、それ以降のすべての信者もまた、主の霊的な安息の場所に入るよう努めなければなりません。それは、私たちを取り囲むどのような困難の中にあっても、主が救い出してくださることを信頼し、その安息の中で主の平安を受け取りつつ、主の救いの実現を忍耐をもって待ち望むことを意味しています。

あなたは、心をあなたに堅くとどめている者を、完全な平安(直訳「二重の平安」;  $\text{dihv dihv}$ (シャローム・シャローム))のうちに守られます。それは、その人があなたに信頼しているからです。

(イザヤ 26 章 3 節/NKJV 訳)

しかし、パウロの手紙の受取人たちの大半は、実際にはこのようにしていませんでした。彼らは、迫害のただ中にあっても主に信頼し、外的な反対にもかかわらず主の安息の場に入る代わりに、不信者たちに迎合し、出エジプトの世代とまったく同じように、心の中で再びエジプトへ戻っていったのです。その結果、彼ら自身もまた「この世代」の一部となってしまいました。

それだから、神の安息にはいるべき約束が、まだ存続しているにもかかわらず、万一にも、はいりそこなう者が、あなたがたの中から出ることがないように、注意しようではないか。(ヘブル 4 章 1 節)

## 十二節

(12)兄弟たちよ、あなたがたのうちのだれも、生ける神から離れ去る(文字どおりには「背教する」)不信仰の悪い心が生じないように、気をつけなさい。(ヘブル3章12節/NIV訳)

この節は、エルサレムの信者たちが直面していた問題の本質と、その危険性をきわめて明確に示しています。不信、すなわち信仰の欠如とは、主に信賴して守りを委ねることをやめ、真理を学び、信じ、適用することから離れてしまうことです。それは靈的成長から背を向け、かつて福音によって救い出されたはずの律法主義(あるいはグノーシス主義)という偽りの道へと再び戻っていくことを意味します。これは、きわめて危険で、命に関わる行為です。信仰は弱まることがあります。信仰は侵食されることがあります。そして、クリスチャンが靈的後退という暗い道を、長く、深く進み続けるならば、信仰そのものが完全に失われてしまうことさえあり得ます。かつては信じていたにもかかわらず、今はもはや信じていない人々が、実際に存在するのです。

**岩の上に落ちたのは、御言を聞いた時には喜んで受け入れるが、根が無いので、しばらくは信じていても、試練の時は来ると、信仰を捨てる人たちのことである。(ルカ8章13節)**

この手紙の受取人たちは、確かに信者でした。しかし、イエス・キリストによってすでに成就されたにもかかわらず、不信者たちによって歪めて解釈されていた律法の「死んだ文字」に立ち返ることによって、彼ら自身も再び不信の状態へと後退してしまう危険にさらされていたのです。もし彼らが本当に、「イエスがキリストであり、神の御子であり、信じることによって御名によるいのちを得る」(ヨハネ20章31節/NIV訳)と信じていたのなら、なぜそのような行動を取る必要があったのでしょうか。律法は、主ご自身、その受肉、そして十字架における偉大な犠牲を予表する影にすぎませんでした。今や、その祝福された勝利が現実のものとなった以上、不信者によって執り行われ、誤って解釈されている「影」に戻ることは、本質的には靈的反逆行為に等しいものでした。

私はあなたにこの命令を与える。テモテ、わたしの子よ。これは、あなたについて以前になされた数々の預言に従ったものであり、あなたがそれらの預言にかなった良い戦い(良い戦役)を戦うためである。すなわち、信仰と清い良心とを保ち続けなさい(参照:[第一テモテ1章5-6節](#))。ところが、この[良心]を退けた(字義的には「押しのかけた」)人々がいて、[その結果として]彼らは自分たちの信仰を難破させてしまった。(第一テモテ1章18-19節)

(1)御霊ははっきりと語っている。終わりの時に、ある人々が信仰から離反し、[その代わりに]惑わす霊どもや悪霊の教えに心を向け、これに従うようになることを。(2)それは、自分たちの**良心**が焼き印を押されたように麻痺してしまった者たちが、[偽りを商売にする]偽善的な言葉をもって語ることで起こるのである。(第一テモテ 4 章 1-2 節/NIV 訳)

[自分自身が]きよい人には、すべてのものがきよい。しかし、汚れている不信仰な人には、きよいものは一つもなく、その知性も**良心**も汚れてしまっている。(テトス 1 章 15 節)

信者は、自分でも「ひどく間違っている」と分かっていることを続けながら、良心の墮落と信仰の侵食を受けずに済むことはありません。もしこの恐ろしい過程が悔い改めなしに続いていくなら、心は次第に頑なになり、かつては決して行おうとも思わなかったような行為に対しても、もはや抵抗を感じなくなってしまいます。さらに、この場合の行動は、彼らを贖い取ってくださった方(キリスト)に真っ向から逆らう罪であったため、この内的圧力の熱の中で、やがて彼らのキリストへの信仰そのものが完全に消滅してしまうことは避けられませんでした。肉体的な安全を得るために死んだ儀式へと立ち返るなら、遅かれ早かれ、「不信仰(すなわち信仰の欠如)の悪い心」が必ず形成され、そしてついには、「生ける神から離れ去る(直訳:背教する)」状態にまで至るのです。

ことわざに、「犬は自分の吐いた物に帰り、豚は洗われても、また、どろの中に行きかかるとあるが、彼らの身に起ったことは、そのとおりである。(第二ペテロ 2 章 22 節)

### 十三節

(13)むしろ、「きょう」と呼ばれている間(すなわち、私たちがなおこの世にとどまっている間)、日ごとに互いに励まし合いなさい。それは、あなたがたのうちのだれも、罪の欺きによって[心が]かたくなにされてしまうことがないためです。

#### 励まし:

相互の励ましは、キリストのからだの主要な働きの一つです。しかし主にある相互の励ましは、信者同士が、対面であれ他の形であれ、互いに交わりを持っていないと

成り立ちません。しかもそれは、キリスト者とその信仰に理解も関心も持たない不信者によって支配され、妥協を強いられている場では不可能です。神殿において動物犠牲に参与すること——それは実質的には「神の御子を再び十字架につけ」、「公然の恥にさらす」こと(ヘブル 6 章 6 節)に等しい行為でした——そのような場が、信者たちが互いを前向きに励まし合う場所であるはずが**ありません**でした。そこでは、自分たちがキリスト者であると認めることさえ、彼らが恐れていた結果を招きかねず、その恐れこそが、そもそも彼らを再び律法主義的なユダヤ教的慣行へと戻らせる圧力となっていたのです。さらに悪いことに、これらの信者の多くは、キリスト者であると知られることを恐れて、「集会そのものを放棄して」いました。神の御言葉を聞き、各人が与えられた霊的賜物を用いて互いに励まし合うための集まりを、ほとんどやめてしまった人々が、こそこそと個別に接触する程度では、霊的成長を真剣に維持することなど到底できません。そして、クリスチャンが成長していなければ、霊的衰退は避けられません。とりわけ、エルサレムの多くの信者たちがそうであったように、不信者の偽りの礼拝に偽善的に加わっている場合には、その退歩は必然的なものとなります。

(24)そして私たちは、互いの奉仕[働き]に注意深く目を留め合い、それによって自分自身の愛と善い行いへと互いを奮い立たせるために心を配ろうではありませんか。

(25)ある人々が習慣としているように、互いの集会を放棄することなく[それはこの働きを不可能にする行為です]、むしろ主の働きにおいて忍耐し続けるように**互いに励まし合い**なさい。そして、そのような励ましを、主の日が[ますます]近づいているのを見るにつれて、いよいよ一層強めていきなさい。(ヘブル 10 章 24-25 節)

### 「今日」と呼ばれているかぎり、毎日：

イエス・キリストは、昨日も今日も、そして永遠に変わることがありません。(ヘブル 13 章 8 節)

この人生は、すべてイエス・キリストを中心として成り立っています。主は昨日も私たちの主であり救い主でした。今日もそうであり、そして永遠にわたってもそうであり続けます。過去は変えることができません。そして私たちの永遠の将来は、「最初の確信[すなわち信仰]を終わりまで堅く保ち続けるならば」(ヘブル 3 章 14 節; 参照 3 章 6 節, 6 章 11 節)確定し、保証されています。私たちは過去のことを忘れるようにと命じられています(ピリピ 3 章 13 節)。また、明日のことを思い煩ってはならないとも命じられ

ています(マタイ6章34節)。この世に生きている間、私たちに与えられているのは、一日ずつ——すなわち「今日」だけなのです。

(9)だから、あなたがたはこう祈りなさい、天にいますわれらの父よ、御名があがめられますように。(10)御国がきますように。みこころが天に行われるとおり、地にも行われますように。(11)わたしたちの日ごとの食物を、きょうもお与えください。(12)わたしたちに負債のある者をゆるしましたように、わたしたちの負債をもゆるしてください。(13)わたしたちを試みに会わせないで、悪しき者からお救いください。(マタイ6章9-13節)

私たちは毎日この祈りを祈っています(少なくとも、そうあるべきです)。すなわち、父なる神に、今日という一日のために、肉体的にも霊的にも必要なものを備えてくださるよう願う祈りです。私たちが確実につかむことのできる日は、「今日」以外にありません。なぜなら、すべての日は神から与えられた賜物であり、すべての日は、主イエス・キリストをさらに深く知り、この暗い世を主とともに歩み、そして主が与えてくださる奉仕を通して他の人々も同じ歩みへと導くための機会だからです。明日、主が私たちを御もとへ召されるかもしれません。昨日はすでに神の完成された御計画の中に、取り消すことのできない形で記録されています。しかし「今日」、私たちはこの世に生きており、神が恵みによって一人ひとりに与えてくださった「自由意志による信仰」、すなわち神のかたち(イメージ・オブ・ゴッド)を用いて、イエス・キリストのために生きることも……生きないことも、選ぶことができる立場に置かれています。そして私たちが取り得る最も愚かな行為とは、昨日のことで抱く罪悪感や悲嘆のために、あるいは明日への不安のために、今日という一日を信仰において妥協してしまうことです。なぜなら、昨日はもはや変えることができず、そして明日は来ないかもしれないからです。たとえ来たとしても、それは私たちの予期することとはまったく違う形で訪れる可能性が高いのです。

(13)よく聞きなさい。「きょうか、あす、これこれの町へ行き、そこに一か年滞在し、商売をして一もうけしよう」と言う者たちよ。(14)あなたがたは、あすのこともわからぬ身なのだ。あなたがたのいのちは、どんなものであるか。あなたがたは、しばしの間あらわれて、たちまち消え行く霧にすぎない。(15)むしろ、あなたがたは「主のみこころであれば、わたしは生きながらえもし、あの事この事もしよう」と言うべきである。(16)ところが、あなたがたは誇り高ぶっている。このような高慢は、すべて悪である。(17)人が、なすべき善を知りながら行わなければ、それは彼にとって罪である。(ヤコブ4章13-17節)

ヤコブが上の箇所語っている要点は、ここでパウロが示唆していることとまったく同じです。すなわち、私たち信者は、昨日の重荷を手放し、明日のことは主に委ね、そして今日なすべきことに集中する責任があるということです。もちろん、これは正当な計画を立てること自体を否定しているわけではありません。ヤコブもパウロも、そのようなことを言っているではありません。むしろ、私たちは信者として、自分の時が完全に主の御手の中にあること(詩篇 31 篇 15 節)、成し遂げられるのは自分の意志ではなく神の御心であること(ルカ 22 章 42 節)、そして神のご計画は完全である一方、私たちの理解はとくに明日の出来事を見通す点において不完全であることを、よく自覚しているべきだということです。

(6) 私が安らかであると思ったとき、私は言いました。「私は決して動かされることはない」と。(7) 主よ、あなたの恵みによって、あなたは私の山を堅く据えてくださいました。しかし、あなたが御顔を隠されたとき、私はたちまち恐れ感いました。(詩篇 30 篇 6-7 節)

真の謙遜とは、すべてを完全に支配しておられるのが主であることを理解し、私たち信者が、昨日に起こったことや明日起こるかもしれないことに過度にとらわれることなく、「今日」主に従って歩むことに最善を尽くすべきだと悟ることです。なぜなら、それこそがキリスト者の歩みにおいて唯一安全な前進の道だからです。

(1) 主はわたしの牧者であって、わたしには乏しいことがない。(2) 主はわたしを緑の牧場に伏させ、いこいのみぎわに伴われる。(3) 主はわたしの魂をいきかえらせ、み名のためにわたしを正しい道に導かれる。(4) たといわたしは死の陰の谷を歩むとも、わざわざを恐れません。あなたがわたしと共におられるからです。あなたのむちと、あなたのつえはわたしを慰めます。(詩篇 23 篇 1-4 節)

これこそが正しいあり方です。すなわち、ヘブル書の文脈で引用されている詩篇が語るとおり、私たちは「御手の中の羊」として(詩篇 95 篇 7 節)、主にぴったり従って歩むことです。ところが、「一日一日を大切に生きる」という姿勢を離れ、ヤコブが先に例として挙げたような過度の先走った期待や、これから起こるかもしれないことへの思慮の足りない不安に押し流されてしまうなら、私たちは自分の霊的な物の見方そのものを根本から取り違えてしまう深刻な危険にさらされることになります。この美しい詩篇を書いたダビデも、ほとんどの場合、この「一日ずつ主に委ねて歩む」生き方を実践していました。しかし、そうしなかったときには、彼は大きな代償を払うことになりました。ジブ人たちが彼の居場所を裏切ってサウルに知らせた後、「のがれの岩」と呼ばれる場所で、ダ

ダビデと部下たちはサウルにほとんど捕らえられそうになりました。彼が間一髪で逃れることができたのは、主がペリシテ人の襲来を知らせる使者をサウルに送らせ、追撃を最後の瞬間に中断させられたからにすぎませんでした([サムエル記上 23 章 19-29 節](#))。この危機の後にも、同様の危険な状況が何度も続きました(第一サムエル記 20 章から 26 章参照)。そして主はそのすべてからダビデを忠実に救い出してくださいました。それにもかかわらず、やがてダビデは靈的に疲れ果て、「今日」主に羊飼いとして導いていただくことに身を委ねる代わりに、「明日」に対する恐れに心を明け渡してしまったのです。

ダビデは心のうちに言った、「わたしは、いつかはサウルの手にかかって滅ぼされるであろう。早くペリシテびとの地へのがれるほかはない。そうすればサウルはこの上イスラエルの地にわたしをくまなく捜すことはやめ、わたしは彼の手からのがれることができるであろう」。(サムエル記上 27 章 1 節)

ダビデは祭司アビヤタルを伴っており、エポデも手元にありました。実際、彼はそれ以前にも同じような状況において、主に直接尋ねて導きを受けていました([サムエル記上 23 章 6-12 節](#))。しかしこの時は、これまで主が何度も忠実に救い出してくださいましたにもかかわらず、サウルの執拗な追跡を恐れるあまり、自分自身の判断で、部下たちを率いてペリシテ人の町ガテへ行く決断をしてみました(しかも以前そこへ行ったときには、命の危険にさらされただけでした。[サムエル記上 21 章 10-15 節](#)参照)。このように、信仰のない者たちの手と支配の中に自分を委ねてしまったというこの誤った決断の結果、ダビデはその後、継続的に欺きを用いなければならない立場に追い込まれ([サムエル記上 27 章 9-12 節](#))、さらには自分の民と戦わざるを得なくなりそうになるところまで追い込まれました([サムエル記上 28 章 1-2 節](#), [29 章 1-11 節](#))。主はこの窮地からも、恵みによってダビデを救い出してくださいました。しかし同時に、チクラグの町が略奪されることをお許しになり、その結果、ダビデは自分の部下たちから石打ちにされそうになるほどの極めて危険な状況にまで追い込まれました([サムエル記上 30 章 6 節](#))。偉大な神の人であったダビデは、もちろんここから靈的に立ち直りました(この時は主に伺いを立てています。[サムエル記上 30 章 7-8 節](#))。そして主は、失われたすべてのものを完全に回復させただけでなく、さらに多くの戦利品をも与えるという大勝利をもたらされました([サムエル記上 30 章 16-20 節](#))。しかし、よく考えてみるべきことがあります。もし最初から荒野において主が守ってくださることを信頼していさえすれば、これら二つの「危うい出来事」は、そもそも起こる必要がなかったのです。私たちは常に、自分で何とかしようとするよりも、物事を主の御手に委ねるほうがはるかに良いのです。目に見えない「明日」のために「今日」を台無しにしてしまうべきではありません。

神の完全な御計画の中には、「いつかそのうち」というものは存在しません。あるのは「今日」だけです。キリストを信じる私たちの務めは、この「今日」を一日一日、最大限に生かして歩み続け、やがて愛する救い主と永遠に顔と顔とを合わせてお会いする、あの祝福に満ちた日へと至ることなのです。

今の時を生かして用いなさい。今は悪い時代なのである。(エペソ 5 章 16 節)

今の時を生かして用い、その人に対して賢く行動しなさい。(コロサイ 4 章 5 節)

## 十四節

(14)というのは、私たちは、もし最初の確信[すなわち、信仰]を、終わりまでしっかりと保ち続けるなら、キリストにあずかる者となっているからです。(ヘブル 3 章 14 節)

### キリストにあずかる者：

ここで言われている「あずかる (share: 分け前)」という語は、本章 1 節でパウロが、遅れて改めて書簡の挨拶を始める際に用いた語と同じものです。そこで彼は読者たちを、「天からの召しにあずかる者たち (partakers [“sharers”] of the call [come] from heaven)」と呼びましたが、これは、彼らの救いが永遠の過去において神の御計画の中に書き込まれていた信者たちを指す簡潔な表現です。ここでパウロは、すべての信者が共有しているこの「分かち合い」が、イエス・キリストとの特別な関係における共有であることを強調しています。私たちは皆キリストに属しており、またキリストもまた私たちすべてに属しておられるのです。パウロが前章でも述べているとおりです……。

(10)というのは、万物がその方のために存在し、また万物がその方を通して存在している方[父]が、苦難を通して、彼らの救いの創始者、すなわち多くの子らを栄光へ導いた方[私たちの主イエス・キリスト]を完全なものとされたのは、[父に]ふさわしいことであったからである。(11)というのは、聖とする者も、聖とされる者たちも、すべて一人の[父]から出ているからであり、この理由のために、[キリスト]は彼らを兄弟と呼ぶことを恥とはされない。(12)彼はこう言っておられる。「わたしはあなたの名を、わたしの兄弟たちに告げ知らせ、会衆のただ中で、あなたをほめたたえるであろう。」(詩篇 22 篇 22 節) (13)また、別のところで、「わたしは[わたしもまた]、彼[父]に信頼を置く」(イザヤ 8 章 17 節) さらに別のところ

で、「見よ、わたしと、神がわたしに与えてくださった子らとは」([イザヤ 8 章 18 節](#))と言っておられる。(14)それゆえ、「これらの子ら」(すなわち父によってキリストに与えられた信者たち:13 節)が血と肉とを持っているので、彼[キリスト]もまた、非常によく似た形で(すなわち、処女懐胎であり罪がなかった点のみが同一ではないが)同じものを受けられた。それは、彼の死を通して、死の力を持つ者、すなわち悪魔を無力にし、(15)死の恐れによって一生涯奴隷となっていた者たちを、[神へと]和解させるためであった。(ヘブル 2 章 10-15 節/NIV 訳)

私たち信者は皆、イエス・キリストの選ばれた、また比類なき尊い集まり——すなわちキリストの教会、花嫁、そして御からだそのもの——の一員です。そして、私たちが特別なかたちでキリストに属しているのと同じように、キリストもまた私たちに属しておられます。それは、夫と妻が互いに完全に結ばれているのと同じ関係なのです。

(23)というのは、夫は妻のかしらであり、それはキリストが教会のかしらであられるのと同じであり、教会はキリストのからだであって、キリストご自身がその救い主であられるからである。(24)それで、教会がキリストに従うように、妻もすべてのことにおいて夫に従うべきである。(25)夫たちよ、キリストが教会を愛し、そのためにご自身をささげられたように、あなたがたも妻を愛しなさい。(26)キリストがそのようにされたのは、みことばによる水の洗いをもって教会をきよめ、聖なるものとするためであり、(27)しみもしわも、その他どんなきずもない、栄光に輝く教会として、ご自身の前に立たせるためであった。すなわち、聖く、きずのないものとするためである。(28)そのように、夫も自分のからだのように妻を愛すべきである。妻を愛する者は、自分自身を愛しているのである。(29)だれも自分のからだを憎んだ者はいない。かえって、それを養い育てるのであって、それはキリストが教会になさっているのと同じである。(30)私たちはキリストのからだの肢体だからである。(31)「それゆえ、人は父と母を離れ、その妻と結ばれ、二人は一体となるのである。」(32)この奥義は偉大である——しかし、私は**キリストと教会について語っている**のである。(エペソ 5 章 23-32 節/NIV 訳)

#### 終わりまで堅く保つこと：

私たちがイエス・キリストと持っているこの特別な関係は永遠のものです——ただしそれは、「最初の確信[すなわち信仰]を、終わりまで堅く保ち続けるならば」という条件のもとにおいてです。不貞による離婚が現実になりうるように、私たちの救い主がいかに限りなく憐れみ深く、忍耐強いお方であられるとしても(たとえば[詩篇 103 篇 1-13 節](#)参照)、裏切られることを喜ぶ夫はいません。エルサレムの多くの信徒たちが律法へ

と戻ることによってしていたことは、本質的にはまさにこの「不貞」に等しい行為でした。そして、和解がもはや不可能となる地点が存在します。この比喩において、信者にとってのその地点とは、信仰が完全に消え失せてしまう瞬間です。その時、その人はもはや信者ではなくなり、不信者へと戻り、イエス・キリストから失われた者となるのです。

(1)そこで天国は、十人のおとめがそれぞれあかりを手にして、花婿を迎えに出る行くのに似ている。(2)その中の五人は思慮が浅く、五人は思慮深い者であった。(3)思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。(4)しかし、思慮深い者たちは、自分たちのあかりと一緒に、入れものの中に油を用意していた。(5)花婿の来るのがおくれたので、彼らはみな居眠りをして、寝てしまった。(6)夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がした。(7)そのとき、おとめたちはみな起きて、それぞれあかりを整えた。(8)ところが、思慮の浅い女たちが、思慮深い女たちに言った、『あなたがたの油をわたしたちにわけてください。わたしたちのあかりが消えかかっていますから』。(9)すると、思慮深い女たちは答えて言った、『わたしたちとあなたがたとに足りるだけは、多分ないでしょう。店に行って、あなたがたの分をお買いになる方がよいでしょう』。(10)彼らが買いに出ているうちに、花婿が着いた。そこで、用意のできていた女たちは、花婿と一緒に婚宴のへやにはいり、そして戸がしめられた。(11)そのあとで、ほかのおとめたちもきて、『ご主人様、ご主人様、どうぞ、あけてください』と言った。(12)しかし彼は答えて、『**はっきり言うが、わたしはあなたがたを知らない**』と言った。(13)だから、目をさましていなさい。その日その時が、あなたがたにはわからないからである。(マタイ 25 章 1-13 節)

(24)そこでイエスは人々にむかって言われた、「狭い戸口からはいるように努めなさい。事実、はいろいろとしても、はいれない人が多いのだから。(25)家の主人が立って戸を閉じてしまってから、あなたがたが外に立ち戸をたたき始めて、『ご主人様、どうぞあけてください』と言っても、主人はそれに答えて、『**あなたがたがどこからきた人なのか、わたしは知らない**』と言うであろう。(ルカ 13 章 24-25 節)

主から拒まれるということは、恐るべき結末です。実際、信者にとってこれ以上に恐ろしいことはありません——少なくとも、私たちは主に対する不忠という問題を、そのように受け止めるべきです。罪を犯すことと、「またもや神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにすること」([ヘブル 6 章 6 節](#))とは、まったく別次元の問題です。そのような行為に及ぶのは、不信者以外に誰がいるのでしょうか。そして、もし信者がそのようなことを行う、あるいは行おうとするならば、それがどれほど危険な、この世への逆戻りで

あるかを理解できなくなっているという事実自体が、すでにその人の信仰が鈍り、ほとんど消えかかるところまで衰弱してしまっていることを示しているのです。

(28)モーセの律法を無視する者が、あわれみを受けることなしに、二、三の人の証言に基いて死刑に処せられるとすれば、(29)神の子を踏みつけ、自分がきよめられた契約の血を汚れたものとし、さらに恵みの御霊を侮る者は、どんなにか重い刑罰に価することであろう。(ヘブル 10 章 28-29 節)

この点、すなわち信仰の忍耐(堅持)の必要性は、聖書全体に繰り返し現れる重要な主題です(本章序論における「背教と死に至る罪」の項を参照下さい<配信版では「改訂版 ひとしづく 5036 ヘブル 3 章<6>」>)。またパウロも、この書簡全体を通して何度も強調しています(ヘブル 3 章 6 節, 4 章 14 節, 6 章 11 節, 6 章 18 節, 10 章 23 節など)。それはまさに、信仰を最後まで保つことができず、キリストを事実上拒む行動によって信仰が劣化し、再び不信へと逆戻りしてしまう危険が、エルサレムの信者たちに差し迫っていたからです。もし彼らが態度を改めず、すでに役割を終えた律法やグノーシス主義を捨てて霊的成長へと立ち返らなければ、彼らを待っているのは、死に至る罪、あるいは、信仰を完全に失い切ってしまった場合には背教以外にはなかったのです。

(11)次の言葉は確実である。「もしわたしたちが、彼と共に死んだなら、また彼と共に生きるであろう。(12)もし耐え忍ぶなら、彼と共に支配者となるであろう。もし彼を否むなら、彼もわたしたちを否むであろう。(13)たとい、わたしたちは不真実であっても、彼は常に真実である。彼は自分を偽ることが、できないのである」。(第二テモテ 2 章 11-13 節)

## 十五節-十六節

(15)「きょう、もし御声を聞くなら、荒野での試みの時の反逆においてしたように、あなたがたの心をかたくなにすることはならない」と言われているとおりです。

(16)さて、[主の言葉を]聞いていながら神を怒らせたのは、だれでしたか。それは、モーセに率いられてエジプトを出た者たちすべてではありませんでしたか。(ヘブル3章15-16節)

ここで引用されている詩篇95篇が想起させる戒めの物語において、出エジプトの世代は、実際には主が彼らのために重ねて示された多くの恵み深い働きに応えませんでした。パウロがここで強調しているのは、彼らがイスラエル人であり、アブラハムの子孫であり、神がエジプトから、パロとエジプト人の手から、驚くほどの奇跡によって救い出された特別な民であったとしても、それだけで神の裁きから免れることはなかった、という点です。彼らは過越の夜に血によるしるしを戸口に塗り、死の御使いを免れ([出エジプト記12章13節](#))、また分かれた紅海を「信仰によって」渡りました([ヘブル11章29節](#))。しかし、その最初の信仰にもかかわらず、また彼ら自身が目撃し体験した数々の驚くべき奇跡にもかかわらず、その信仰は持続しませんでした。彼らは荒野の放浪の中で、絶えず神(そしてモーセ)を試み続け、その結果、ついには神が彼らの大多数を滅ぼされるという結末に至りました([ユダの手紙1章5節](#))。

(1)兄弟たちよ。このことを知らずにいてもらいたくない。わたしたちの[霊的な]先祖(すなわち出エジプトの世代)はみな雲の下におり(つまり栄光の臨在によって守られており)、みな海を通り、(2)みな雲の中、海の中で、モーセにつくバプテスマを受けた(すなわち、彼と一体となり、同じ守りと救いを受けたのです)。(3)また、みな同じ霊の食物(すなわち神から与えられたマナ)を食べ、(4)みな同じ霊の飲み物(すなわち神から与えられた水)を飲んだ。すなわち、彼らについてきた[重要な意味を持つ]霊の岩から飲んだのであるが、この岩はキリストにほかならない。(5)しかし、彼らの中の大多数は、神のみこころにかなわなかったため、荒野で滅ぼされてしまった。(6)これらの出来事は、わたしたちに対する警告(の実例)であって、彼らが悪をむさぼったように、わたしたちも悪をむさぼることのないためなのである。(7)だから、彼らの中のある者たちのように、偶像礼拝者になってはならない。すなわち、「民は座して飲み食いをし、また立って踊り戯れた」と書いてある(すなわち、宴会の後、偶像礼拝的儀式にふけたのです)。(8)また、ある者たちがしたように、わたしたちは不品行をしてはならない。不品行をしたため倒された者が、一日に二万三千人もあった。(9)また、ある者たちがしたよう

に、わたしたちは主を試みてはならない。主を試みた者は、へびに殺された。(10) また、ある者たちがつばやいたように、つばやいてはならない。つばやいた者は、「死の使」に滅ぼされた。(11/NIV 訳)これらの事が彼らに起ったのは、他に対する**実例**としてであって、それが書かれたのは、世の終りに臨んでいるわたしたちに対する**警告**のためである。(12)だから、立っていると思う者は、倒れないように気をつけるがよい。(13)あなたがたの会った試練で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試練に合わせることはないばかりか、試練と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。(第一コリント 10 章 1-13 節)

出エジプトの世代は「モーセにつくバプテスマを受けた」、すなわち彼と密接に結びつけられ、彼と一体視されていました(というのも、この語のギリシヤ語本来の意味は「一つのものを別のものの中に浸して、両者を強く結びつける」ということだからです)。そして彼らはある程度まで、この偉大な神の人であるモーセの保護のもとにあるという理由だけで、祝福を受け、恩恵にあずかっていました。たとえば、モーセが主に取りなして、彼らを滅ぼさないようにと願い出たときがそうです(これは一度だけでなく、何度も起こりました。参照：[民数記 14 章 11-23 節](#))。

(7)主はモーセに言われた、「急いで下りなさい。あなたがエジプトの国から導きのぼったあなたの民は悪いことをした。(8)彼らは早くもわたしが命じた道を離れ、自分のために鑄物の子牛を造り、これを拝み、これに犠牲をささげて、『イスラエルよ、これはあなたをエジプトの国から導きのぼったあなたの神である』と言っている」。(9)主はまたモーセに言われた、「わたしはこの民を見た。これはかたくなな民である。(10)それで、わたしをとめるな。わたしの怒りは彼らにむかって燃え、彼らを滅ぼしつくすであろう。しかし、わたしはあなたを大いなる国民とするであろう」。(11)モーセはその神、主をなだめて言った、「主よ、大いなる力と強き手をもって、エジプトの国から導き出されたあなたの民にむかって、なぜあなたの怒りが燃えるのでしょうか。(12)どうしてエジプトびとに『彼は悪意をもって彼らを導き出し、彼らを山地で殺し、地の面から断ち滅ぼすのだ』と言わせてよいのでしょうか。どうかあなたの激しい怒りをやめ、あなたの民に下そうとされるこの災を思い直し、(13)あなたのしもべアブラハム、イサク、イスラエルに、あなたが御自身をさして誓い、『わたしは天の星のように、あなたがたの子孫を増し、わたしが約束したこの地を皆あなたがたの子孫に与えて、長くこれを所有させるであろう』と彼らに仰せられたことを覚えてください」。(14)それで、主はその民に下すと言われた災について思い直された。(出エジプト 32 章 7-14 節)

しかし、このようにモーセと結びついていたことによる大きな恵みを受けていながら、出エジプトの世代は、モーセが自分たちのためにしてくれたことを本当の意味で理解せず、ましてや主が成し遂げてくださった御業を正しく受け止めることもありませんでした。もし彼らがそれを本当に理解していたなら、悔い改めて主に立ち返っていたはずですが。しかし実際には、「心の中でエジプトに戻ろうとした」([使徒行伝 7 章 39 節](#); [民数記 14 章 3-4 節](#); [アモス 5 章 25-27 節](#)参照)のです。確かに、アブラハムの子孫であるという肉系的系譜には一定の特権があります([ローマ 3 章 1-2 節](#), [11 章 28 節](#))。しかし、人が外見を見るのに対して、神は常に心をご覧になります([サムエル記上 16 章 7 節](#))。モーセと密接に結びついていたという事実だけでは、出エジプト世代は救われませんでした。それは、彼らの心が変わらなかったからです([エゼキエル 14 章 14-18 節](#); [第一コリント 7 章 14 節](#)参照)。同様に、エルサレムの信徒たちも、自分たちの宗教的伝統や血統に頼っている限り、この無謀な歩みを改めなければ救いには至らなかったのです。

自分たちの父にはアブラハムがあるなどと、心の中で思ってもみるな。おまえたちに言うておく、神はこれらの石ころからでも、アブラハムの子を起すことができるのだ。(マタイ 3 章 9 節)

### 十七節-十九節

(17)また、四十年の間、神が憤られたのは、だれであったか。それは、罪を犯し、荒野で倒れて死んだまさにその人々ではなかったか。(18)さらに、神が、だれに対して、ご自分の[約束された場所の]安息に入らせないと誓われたのか。それは、神を信じようとしなかった者たちではなかったか。(19)こうして私たちは、彼らが不信仰(すなわち、信仰の欠如)のゆえに、この[安息の]場所に入ることができなかつたことがわかる。(ヘブル 3 章 1-19 節)

#### まさにその人々：

パウロはここで、律法へ逆戻りしようとしている者たち(あるいはグノーシス主義に関わろうとしている者たち)が、出エジプト世代とまったく同じ道を歩んでいることを、読者自身に一つひとつ認めさせる形で、主張の核心を突きつけています。神が「この世代」に対して憤られたのは明白です。彼らは主を試み、反逆し、大きな罪を繰り返し、「十度も」主に逆らいました([民数記 14 章 22 節](#))。そして、この反逆の世代に下された報いもまた明白でした。それは、約束の地に入ることを禁じられ、荒野で死ぬことでした。

これは、彼らが「主を信頼しようとしなかった」からこそ、当然の裁きだったのです。主を信頼するとは、主のうちに安らぐこと**です**。主を信頼しないとは、主を無力だとみなすこと、あるいは不正だと疑うこと、または、主をまったく顧みず、畏れと敬意を欠いた態度で生きることです。信者は信じます。不信者は信じません。信者は、救いのために主を信頼し、キリストに信仰を置きます(律法の時代に生きた者たちにとっては、来るべきメシヤへの約束に信仰を置きました)。そして、その後も主が定められたこの世の生涯を、信仰によって歩み続け、御言葉の真理を受け入れ、信仰において成長し続けます。これこそが、主と顔を合わせるその時に完成する私たちの永遠の救いが、今この地上において保たれていく道なのです。

(3) 私たちの主イエス・キリストの神であり父である方がほめたたえられるように。この方は、ご自分の大いなる憐れみによって、イエス・キリストの死人の中からの復活を通して、私たちを生ける望みに生まれ変わらせてくださり、(4) 朽ちることも、汚れることも、色あせることもない相続財産を受け継ぐ者としてくださり、それは天において私たちのために保たれている。(5) あなたがたはまた、**終わりの時に**現される用意が整えられている**究極の救い**[文字通り「救済」]に至るまで、神の力によって、**また主に対する信仰によって守られている**。(6) この救いを望みつつ、あなたがたは大いに喜んでいて。たとえ今は、しばらくの間、さまざまな試練によって苦しまなければならないことがあるとしてもである。(7) それは、**あなたがたの信仰が真実であることが証明されるため**である。信仰は、火で試されるがやがて滅びる金よりもはるかに尊く、イエス・キリストが現される時に、あなたがたにとって、**賛美と栄光と誉れと**をもたらすものとなっている。(8) あなたがたは、この方を目で見たことがないが、それでもこの方を愛している。また、今は見ることができなくても、この方を信じている。それゆえ、言葉に言い尽くせない、**栄光に満ちた喜び**をもって、あなたがたは喜んでいて。(9) それは、**あなたがたの信仰の目的**である、すなわち、たましいの[永遠の]**救い**[文字通り「救済」]を受け取っているからである。(第一ペテロ 1 章 3-9 節/NIV 訳)

ペテロが上で述べているとおり、私たちは救いを受けた後もなおこの世に留められています。それは、私たちの信仰が成長し、試され、練り清められ、人生という炉の中で本物であることが証明されるためです。同時に私たちは、救いの後になお後戻りするという、ある意味で危うい「可能性」も与えられています。すなわち、心の中でエジプトへ戻るように、この世へ引き返し、岩地にまかれた種が日が上ると焼けて枯れてしまうように、実は順境のときだけの信仰者であり、困難なときに主を信頼しようとしないう者であったことを、自ら示してしまう可能性があるのです。それは、主が望んでおられる歩み

ではありません。むしろ、それは出エジプト世代がたどった道と同じものであり、主のみこころとは正反対の方向なのです。

(13)これら[11章に挙げられている著名な信仰者たち]は皆、なお**信仰のうちに** [歩みながら]死んでいった。彼らは[約束の成就を]受けてはいなかった。しかし [生きている間に]、それら[の約束]を遠くから見てこれを認め、[いわば]挨拶するかのように迎え入れ、自分たちが地上において[実質的に]旅人であり寄留者であることを[すべての人々に対して]明らかにしていたのである。(14)このように [信仰を]表明している人々は、自分たちが[今住んでいる場所とは別の]故郷を切望して探し求めていることを、はっきりと示しているのである。(15) もしこれら [信仰者たち]の心が、彼らが出て来た[かつての土地]を慕っていたのであれば、**引き返すための[十分な]機会を持っていたであろう。**(16)しかし実際には、彼らはより良い場所、すなわち天のものを熱心に求めていたのである。それゆえ、神は彼らの神と呼ばれることを恥とはされない。事実、神は彼らのために一つの都 [すなわち新しいエルサレム]を備えておられるのである。(ヘブル 11章 13-16節 /NIV 訳)

エルサレムの多くの信者たちは、主が彼らを「恥じる」ことになりかねない瀬戸際に立っていました。すなわち、主を試みることによって「死に至る罪」に陥ってしまう危険があり、場合によっては、背教によって主を完全に拒み、永遠に失われる危険さえあったのです。彼らは、ほんの数年前にまさにその都でご自身の究極の犠牲をささげられたキリストがおられるにもかかわらず、なお「まだ来られていないメシヤ」を宣言する律法体制へと逆戻りしようとしていたからです。

(17)そこで彼[放蕩息子]は本心に立ちかえって言った、『父のところには食物のあり余っている雇人が大ぜいいるのに、わたしはここで飢えて死のうとしていく。(18)立って、父のところへ帰って、こう言おう、父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。(19)もう、あなたのむすことと呼ばれる資格はありません。どうぞ、雇人のひとり同様にしてください』。(20)そこで立って、父のところへ出かけた。まだ遠く離れていたのに、父は彼をみとめ、哀れに思って走り寄り、その首をだいて接吻した。(21)むすこは父に言った、『父よ、わたしは天に対しても、あなたにむかって、罪を犯しました。もうあなたのむすことと呼ばれる資格はありません』。(22)しかし父は僕たちに言いつけた、『さあ、早く、最上の着物を出してきてこの子に着せ、指輪を手にはめ、はきものを足にはかせなさい。(23)また、肥えた子牛を引いてきてほふりなさい。食べて楽しもうではない

か。(24)このむすこが死んでいたのに生き返り、いなくなっていたのに見つかったのだから』。それから祝宴がはじまった。(ルカ 15 章 17-24 節)

放蕩息子のたとえと同じように、この人生で誤った道に進んでしまった信者の中にも、手遅れになる前に自分の愚かさを悔い改め、主のもとへ立ち返る人々がいます。まさにそのこと、すなわち、エルサレムにいるそのような「放蕩の息子や娘たち」を立ち返らせることを目的として、パウロは、まだ時間と機会が残されているうちに、彼らもまた滅びの道から引き返すよう、心からの訴えを行っているのです。

#### 彼らの不信仰ゆえに：

出エジプトの世代が約束の地、すなわち本箇所と言う「安息の場所」に入ることができなかったのは、「彼らの不信仰のゆえ」、つまり主に対する信仰と信頼を欠いていたためでした。彼らは、カナンに住む危険な民について十人の斥候が報告したとき恐れに屈し、その後も生涯にわたって主を疑い、主を試し続けました。それと同じように、当時のエルサレムの信徒たちも、不信者が多数を占める社会から排斥されることへの恐れゆえに、大きな部分で律法へと逆戻りしつつありました。私たちが恐れや疑い、罪責感から、この世やこの世における自分の生活への配慮から物事を行うとき、いったいどのようにして神を信頼していると言えるでしょうか。私たちが恐れ、不安に揺さぶられているという事実そのものが、私たちが神のうちに安息していないことのしるしです。主は私たちの堅固な砦です(詩篇 46 篇 1 節)。主は私たちの救いの箱舟です(第一ペテロ 3 章 20-21 節)。主は私たちの力であり盾です(詩篇 28 篇 7 節)。しかし、助けを主に求め、主の救いを待ち望む代わりに、この世をなだめるために真理を妥協するならば、私たちはまさに出エジプトの世代が行ったのと同じこと、そして信仰から後退しつつあったエルサレムの信徒たちが行っていたのと全く同じことをしているのです。

それからトマスに言われた、「あなたの指をここにつけて、わたしの手を見なさい。手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。**信じない者にならないで、信じる者になりなさい**」。(ヨハネ 20 章 27 節)

私たちは誰一人として完全ではありませんし、どの信者も、ダニエルのような信仰、パウロのような信仰、エリヤのような信仰を、一夜にして身につけるわけではありません。ですから、この人生で私たちが直面する圧力や苦難は、私たちの益のために与えられているのです。それらは私たちの信仰を精錬し、どこにひびや断層があるのかを示し、それを修復し鍛え直す機会を与えます。そしてその信仰を強め、よりしなやかで耐久力のあるものとし、さらに大きな試練や重圧にも耐え得るようにしていきます。私た

ちは皆、こうした試験において、部分的であれ全面的であれ、失敗した経験を持っています。しかし、失敗から学び、あきらめずに踏みとどまる者は、信仰において成長していきます。そしてやがて、どのような事態に直面しようとも、主のためにしっかりと立ち続けることのできる地点に至ります。すなわち、私たちが主に仕えているあの目に見えない霊的戦いの最前線において、何が起ころうとも揺るがず立つことができるようになるのです。

(10)最後に言う。主にあつて、その偉大な力によって、強くなりなさい。(11)悪魔の策略に対抗して立ちうるために、神の武具で身を固めなさい。(12)わたしたちの戦いは、血肉に対するものではなく、もろもろの[天使的な]支配と、[天使的な]権威と、[現在の]やみの世の主権者、また天上にいる悪の霊に対する戦いである。(13)それだから、悪しき日にあたって、よく抵抗し、完全に勝ち抜いて、(これまでの霊的成長と現在の霊的適用をして)堅く立ちうるために、神の武具を身につけなさい。(14)すなわち、立って真理の帯を腰にしめ、正義の胸当てを胸につけ、(15)平和(すなわち、キリストへの信仰の結果としての神との和解)の福音[を分かち合うこと]の備えを足にはき、(16)その上に、信仰のたてを手に取りなさい。それをもって、悪しき者の放つ火の矢を消すことができるであろう。(17)また[この霊的戦いにおいて]、救のかぶとをかぶり、御霊の剣、すなわち、神の言を取りなさい。(エペソ6章10-17節)

これが書かれたのはまさに、このような強靱で、戦いに鍛え上げられた信仰こそが、エルサレムの信徒たちにほどなく必要となる種類のものだったからです。というのも、数年ののち主はユダヤに壊滅的なさばきを下し、神殿とそのすでに廃された儀式体系を取り除き、さらに、メシヤがすでに来臨してそれらの象徴性を成就されたあとでさえ、なお冒瀆的にそれらを続けていた不信者たちをも、一掃されることになったからです。また同様に、このような強靱で戦いに鍛え上げられた信仰こそが、艱難期を耐え抜き、その恐るべき時代の並外れた圧力に屈しないためにも必要となります。しかし、(出エジプト世代の大多数がそうであったように)心の中でエジプトへ戻ること、すなわち不信者と妥協し、キリストを退けて律法のすでに廃された儀式へ立ち返ること(パウロと同時代のある者たちがしていたように)、あるいは(艱難期の期間中、現代の教会の三分の一がそうすると預言されているように)迫害を避けるために獣の刻印を受けることは、取り返しのつかない、決定的なかたちで主を否認することになるのです。

(4)そこでわたしの友であるあなたがたに言うが、からだを殺しても、そのあとでそれ以上なにもできない者どもを恐れるな。(5)恐るべき者がだれである

か、教えてあげよう。殺したあとで、更に地獄に投げ込む権威のあるかたを恐れなさい。そうだ、あなたがたに言うておくが、そのかたを恐れなさい。(ルカ 12 章 4-5 節)

主はこの箇所では明言しておられるとおり、私たちのいのちは、今の肉体そのものにあるのではありません。私たちのいのちは、生活に必要な所有物や日々の糧にかかっているのでもありません(マタイ 6 章 25-34 節; ルカ 12 章 15 節)。神は、私たちが神を信頼してゆだねることを選ぶなら、必ず私たちに顧みてくださいます。私たちが神を敬い、敬虔で畏れ深い心をもって神を畏れるかぎり、この世について何一つ恐れる必要はないのです。

(5) わたしをしえたげる者の不義がわたしを取り囲む悩みの日に、どうして恐れなければならないのか。(6) 彼らはおのが富をたのみ、そのたからの多いのを誇る人々である。(7) まことに人はだれも自分をあがなうことはできない。そのいのちの価を神に払うことはできない。(9) とこしえに生きながらえて、墓を見ないためにそのいのちをあがなうには、あまりに価高くて、それを満足に払うことができないからである。(10) まことに賢い人も死に、愚かな者も、獣のような者も、ひとしく滅んで、その富を他人に残すことは人の見るところである。(11) たとい彼らはその地を自分の名をもって呼んでも、墓こそ彼らのとこしえのすまい、世々彼らのすみかである。(12) 人は栄華のうちに長くとどまることはできない、滅びうせる獣にひとしい。(13) これぞ自分をたのむ愚かな者どもの成りゆき、自分の分け前を喜ぶ者どもの果である。〔セラ (14) 彼らは陰府に定められた羊のように死が彼らを牧するであろう。彼らはまっすぐに墓に下り、そのかたちは消えうせ、陰府が彼らのすまいとなるであろう。(15) **しかし神はわたしを受けられるゆえ、わたしの魂を陰府の力<死者の領域-NIV 訳>からあがなわれる。**〔セラ (詩篇 49 篇 5-15 節)

イエス・キリストに忠実に従うことを志している信徒である私たちにとって、私たちの王国はこの世のものではありません(ヨハネ 18 章 36 節)。私たちの受け分はこの地上の生にあるのでもありません(詩篇 17 篇 14 節)。この肉体もまた、私たちの永遠の住まいではなく、私たちは主ご自身の復活の御体に似たからだを与えられることを待ち望んでいます(第二コリント 5 章 1-10 節)。この世界もまた、私たちが永遠に住む故郷ではありません。私たちは、設計者であり建設者である神ご自身による都を待ち望んでいます(ヘブル 11 章 10 節)。そして私たちは、キリストの完全な花嫁の一員として、新しいエルサレムにおける祝福に満ちた永遠を待ち望み、私たちが贖ってくださった愛

する救い主と顔と顔を合わせてまみえる時を待ち望んでいるのです([黙示録 21 章 9-10 節](#))。

(14)わたしは彼らに御言を与えましたが、世は彼らを憎みました。わたしが世のものでないように、彼らも世のものではないからです。(15)わたしがお願いするのは、彼らを世から取り去ることではなく、彼らを悪しき者から守って下さることです。(16)わたしが世のものでないように、彼らも世のものではありません。(17)真理によって彼らを聖別して下さい。あなたの御言は真理であります。(18)あなたがわたしを世につかわされたように、わたしも彼らを世につかわしました。(19)また彼らが真理によって聖別されるように、彼らのためわたし自身を聖別いたします。(ヨハネ 17 章 14-19 節)

しかし、もし私たちがこの一時的な世界におけるさまざまな圧力や恐れ、不安や苦しさに屈してしまい、かつて自分たちが吐き出して捨て去ったあの汚れたものへと再び立ち返るほど愚かであるなら、その結末は初めよりもはるかに悪いものとなってしまいます([第二ペテロ 2 章 20-22 節](#))。パウロがこの力強く、心からの思いに満ちた書簡を書き送ったのは、まさに彼が愛してやまなかった人々を、そのような想像を絶する破局から救い出すためにほかなりませんでした。

(32)あなたがたは、光に照されたのち、苦しい大きな戦いによく耐えた初めのころのことを、思い出してほしい。(33)そしられ苦しめられて見せ物にされたこともあれば、このようなめに会った人々の仲間にもされたこともあった。(34)さらに獄に入れられた人々を思いやり、また、もっとまさった永遠の宝を持っていることを知って、自分の財産が奪われても喜んでそれを忍んだ。(35)だから、あなたがたは自分の持っている確信を放棄してはいけません。その確信には大きな報いが伴っているのです。(36)神の御旨を行って約束のものを受けるため、あなたがたに必要なのは、忍耐である。(37)「もうしばらくすれば、きたるべきかたがお見えになる。遅くなることはない。(38)わが義人は、信仰によって生きる。もし信仰を捨てるなら、わたしのたましいはこれを喜ばない」。(39)しかしわたしたちは、信仰を捨てて滅びる者ではなく、**信仰に立って、[永遠の]いのちを得る者である**。(ヘブル 10 章 32-39 節)

[へブル人への手紙第四章に続く]